

49-119



宗

教

講

話

加藤玄智著



明治

38 5 20

内交

余は隨つて本書を
亡父の類に献ず

序

本書は余が本年二月女子宗教學會で講演したものを、二三會員の勸
に由り、今回更に出版して世に公にすることとしたものである。固より
組織立つた一部の著書といふてはないが、現今、存に世に流行する自家
信仰の取り止めもない一場の經歷談でも無ければ、去、又徒に理性一
方のみから宗教を批評し去らうと云ふ學究的態度を以て筆を執つた
ものでも、勿論ない。唯出來得る丈、純正なる宗教の眞信仰に同情すると
同時に、十九世紀に於ける學術の進歩を無視しないで、理性の骨格は感
情の血肉と相待ち、知識の常盤木をあやどるものは、信仰の花紅葉であ
ると云ふことを深く、体認して、宗教は實に人生究竟の歸着點であり、道
徳や教育の依つて基する本源であると云ふことを明にし、従つて迷信
なる者は道徳教育等一切人文現象の公敵であると云ふことを説いて
迷信と宗教の異同を辨じ、純正なる宗教心の本性を發揮しやうとする

第三講 宗教と學術の一致……………六二

コムトとペーケン——科學と哲學——哲學の根本問題と宗教の根本問題——哲學の究竟點と宗教の最終目的——哲學と宗教の心理的考察——宗教感情説の批評——宗教の實驗實感説——哲學の對象と宗教の對象——科學の進歩と神話——スターバツク氏の宗教統計

第四講 宗教と道德の調和……………九三

宗教及び道德の起源——宗教と道德の分離——世俗的道德の獨立——世俗的道德の批評——宗教的道德の本義——宗教の反倫理と超倫理——他律道德と自律道德——宗教的道德の極致

第五講 宗教と教育の關係……………一四二

道德の究竟理想としての宗教と教育——修身教授上の實例——教育上人格の完成と宗教的感情の涵養——家庭と學校の聯絡上より見たる宗教の位置——國民教育の目的と宗教——迷信は諸人文現象即ち道德宗教教育の公敵——迷信打破の必要とその方法

參考篇

- 一、チヒラー氏の「信仰と知識」……………一六七
- 二、誤解せられたる哲學と現時の信仰問題……………二一六
- 三、イリングフォース氏の「理性と天啓」を讀む……………二四三
- 四、佛基兩教の發達歷程に於ける知信關係の一瞥……………二六一—二八五

宗教講話目次終

宗教講話

第一講 宗教とは何ぞ

加藤 玄 智 著

本講演の目的——宗教は何である乎——宗教の種類——劣等人文教と高等人文教——
 天竺の宗教——精霊崇拜教——祖霊崇拜教——物活教——咒物崇拜教——
 トテム崇拜教——神格不確立と神格確立——神話的宗教——希臘の純
 多神教——印度の単一神教又は交替神教——イスラエルの拜一神教——唯
 一神教——律法的宗教——倫理的宗教——宗教の總覽——以上宗教の發達階
 段と孔子の思想——ヘルナルツスの宗教的意識發達の四階段——宗教の客觀
 的定義——宗教の主觀的定義

私は是れから宗教と云ふことには極門外の御人に宗教の何であるかと云ふことを一應御話して見やうと思ふのである且し基督教とか

佛教とか云ふ、某々の一宗教の信仰を傳道するのでは無いので、是等の宗教は勿論是れより數等劣つた宗教迄も一くるめにして、宗教と云ふものは一鉢どう云ふものであるかと云ふことを、宗教學の知識に照してざつと御話して、その結果何れの宗教が高等であり何れの宗教が劣等であるか、又何れの宗教が文明の今日に於て信ずるに足る資格のあるものであつて、何れの宗教が信ずるに足らぬ迷信であるか、全學問と宗教の關係はどう云ふものであるか、知識が進むに従つて宗教は次第に衰へてしまふものであるかどうか、宗教と迷信とはどこが違ふか、又宗教と道德の關係はどうであるか、教育との交渉は如何と云ふ様なことに立ち入りて、一通り御話して、人文史上に於ける宗教の位置を明かにし、迷信を破斥して、真正なる宗教の信仰が極めて大切であることを明瞭に見たいと思ふのであります。

宗教は何
てある乎

其中で先づ第一に宗教は何であるか、宗教とはどう云ふものである

宗教の種
類

かと云ふことを明にする爲めには、少し問題を換へて、宗教にはどう云ふ種類があるか、世に所謂宗教と云はれてをるものの中には、どう云ふものが實際含まれてをるか、と云ふことから見て行く方が便利である。併し一概に宗教と云つても、その數尙千百管ならぬのであるから、さう云ふ無數の宗教を一々に數へ立てゝをる時には、維れ日も足らぬのである、それであるから、何か一つの標準を立てゝ、その一定の標準の下に、宗教の標本となるものを數へ擧げて來て、宗教の種類を知らうと思ふのである、してこの標準は今日學界に於て等しく認容されてをる進化の法則進化の順序に由るのを以て至極便利とするのである、則ち宗教の劣等なるものから次第に高等なるものに發達して行く順序に由つて宗教の種類を見て行かうと云ふのである、それは丁度動物の分類をするには、進化の順序に依りて先づ劣等なるアミーバから初めて、次第に高等なる脊椎動物に進み、尙進んで哺乳動物に迄達すると云ふのと同

一であつて、かうすれば動物の種類が學問的に明瞭になる。従つて動物の何たるかを知るに便利である如く、宗教も亦かう云ふ風に分類してその種類がどれ程あるかを一目の下に瞭然たらしめて置けば、宗教そのものゝ何であるかと云ふことを理會するに最も便利なのである。それであるから先づこの人文現象が劣等から高等に進むと云ふ順序に由つて、宗教の種類分けして見て宗教の何たるかを解する準備に供さうと思ふ。

私は進化と云ふ標準からして宗教を先づ二つの部分に大別する、則ちその第一は劣等人文教であつてその第二は高等人文教である、劣等人文教と云ふものは人文現象即ち文明開化のまだ進まぬ人類の信じて居る宗教であつて、高等人文教の方は既に多少とも人文現象即ち文明が發達し稍開明の域に達した人類の信じて居る宗教である、先づ宗教を大體此二つに區分して置いて、扱發達の程度の卑い宗教である劣

劣等人文
教と高等
人文教

等人文教の中にはどう云ふ種類の宗教が含まれてをるかを検査して見やう。

天然崇拜

先づ便宜の爲めに天然崇拜教 Nature-worship or naturism 殊に初歩の天然崇拜教のことから説明しやう、私が初歩の天然崇拜教と云ふのは、日月星辰高山大川樹林猛獸の如き天然物に對して、その勢力の偉大なるに感じ、その活動の不思議なるに驚いて、是等の物、躰、その儘を直に、神として、崇拜するものを稱して斯く名づけたのである、あの眼に見える太陽や月や星のやうな天然現象を神として崇拜するのは、私が申す迄もなく各國ともその文化の程度の低い時代に在りては皆さうである、希臘人の崇拜したアポロン Adollon と云ふ神は太陽である、ディアウス Diois Dians-Zeus と云ふ神は茫々たる無限の蒼空である、パラス、アテーネー Pallas-Athene と云ふ神は嵐である、殊に太陽崇拜の如きは文化の進んだ今日、我國でも尙存してをる、彼の毎朝東天に向つて拍手打つ

て日出を禮拜する人がまだ甚少くないのを見ても分かる、又各地の名山靈嶽と云ふ所へ行つて見ると、皆そこに神様が祭つてあるが、あれは本來は其山嶽そのもの、崇拜であつたのである、又古代の埃及人印度人などはその有名なるナイルの大河や印度川を神として崇拜した、之は川を神として崇拜した實例であるが、高山靈嶽を祭る實例は支那の古代にも澤山あつたので、書經などの中には堯が郊外に幸して某々の山嶽例之泰山を祀つたと云ふ様なことは澤山見えてをる、それから樹や林の如きものを神として崇拜する樹木崇拜の實例は、田舎などへ行くとよく大きな木には七五三を張つてそれを神に祀り込めてをるのを見てもすぐ分かるのである、あれは今日では多少その意味が進んで來ては居るが、その當初に訴れば皆樹木そのものを神として崇拜してをつた初歩の天然崇拜である、又猛獸を神として崇拜したことに就ては、須佐之男尊が出雲の簸の川上へ入候の大蛇を退治された如きはそ

の實例であつて、足名椎手名椎が蛇を山の奥の荒神と云つてをつたのでも分るのである、その外今日でも支那日本を通じて龍蛇崇拜と云ふことはまだ非常に熾である、又各地で稻荷と稱して狐を祭り、大鳥様と稱して十一月に鶯を祭る如きは、この適例である。

以上説明したのは皆初歩の天然崇拜教であつて、日月星辰等の天然現象その儘を直に神として崇拜するのであるが、之より少しく文化の程度が進んで、人が肉體と靈魂との二を有つてをると云ふことを臆げながら氣注いて來る様になると、今度は眼に見える日月星辰等の形體即太陽なり月なり星なりの中には、それぞれ太陽、月、星の靈が這入つてをつて、その爲め日月の盈蝕星辰の運動と云ふ様な目ざましい活動をやり、人の及ばぬ靈力を有してをるのであると、かう考へる様になつてくる、かうなると日月星辰その儘を直に神として崇拜してをつた初歩の天然崇拜が一步進んで一段高等な階段に達して來たものと云はな

ければならない、何故なれば人に在つても肉體と靈魂の別に氣が注ぎ、この比論に由つて太陽や月や星にもこの二の別があると思ふ様になつたのは、人の精神作用が稍、高等に向いて來て、精神が抽象作用をやることに長じて來た結果であるからのことである。

精神作用がこゝ迄進んで來る道行に於て、既に此世界には平常眼にこそ見えぬ、靈魂又は魂魄即ち精靈の spirits と云ふ様なものが存してを、つて、人間に吉凶禍福を持ち來すものであると云ふ信仰が生して來る、その所謂精靈とは元來形體の無いものであつて、白晝人の眼には止まらぬが、暗夜などには時たま眼に觸れることがある、言ひ換へれば、精靈は、夜間時としては眼に見えることはあるが、手には到底觸れることの出來ないものであると考へ、それを神として崇拜すれば、こゝに精靈崇拜の spiritism が起つてくる、彼の死んだ祖先の靈魂を祭る祖靈崇拜教 Ancestor-worship と云ふものは、精靈崇拜教の一種である、俗に所謂祖先教 Ancestor-worship と云ふものは、精靈崇拜教の一種であ

つて、精靈を單に死んだ祖先の靈丈に限つたに過ぎぬのである、日本の祖先教の如教はこの祖靈崇拜教と初步の天然崇拜教とが結び附いたものである、かやうに一定した形體を具へないで、唯靈ばかり宇宙にぶらついてをると思はれてをつた精靈か、天然現象例之山とか川とか樹とか云ふものゝ中に飛び込んだと考へてくると、こゝに日本の古代宗教や希臘羅馬の多神教の様に、山には山の神あり川には川の神ありと云ふ様な八百萬の神が生じてくるのである。

初步の天然崇拜教から精靈崇拜教に進化する順序を逆に回顧すると、私が前に述べた初步の天然崇拜教より一層幼稚な宗教の階段が無ければならぬ、それは和蘭ライデン大學の宗教學教授チール Fiele博士が物活教 Polyzoism と名づけた所のものであつて、その意味は此世界に在る森羅萬象何んでもかても、人間と同じく生きてをるもの生命あるものであつて、その力は實に人間以上に出て、優に人間を壓するもので

ある人は之に對して何となく恐ろしい様な感じがして、人は日月星辰山川草木を初め、宇宙に在りと諸有森羅萬象等自然物の大なる活力に畏服し、萬物は皆生きてをつて上より人間に臨み壓してをると感ずる所から、宇宙間の森羅萬象に神を認めるもの、此に之をチーレは物活教と名けたのである。換言すれば物活教は、初歩の天然崇拜教の尙一層幼稚なものと思れば先づ差し支へないのである。

然るに之と少しく有様を異にして、矢張劣等なる文化の人類中に現はれてをる一の宗教がある、それは呪物崇拜教 Fetichism である、世間では之を庶物崇拜とか拜物教とか申すやうである、則ち主として亞非利加之蠻人黒奴の中に行はれてをる宗教であつて、鳥の羽の美麗なのや、歐羅巴人が偶そこの海岸へ來て、破船でもして残して行つた罎などに、病氣平癒の靈力があるとか、悪魔を拂ふ呪力があるとか思つて、之を崇拜する宗教に名づけたのである、日本で水天宮様の御護札には一種

の呪力がある者と考へて之を一心に念ずると云ふと、遺失物が目付るとか云つて、一心に御護符まごりふたを崇拜する如きは呪物崇拜教の一種である。之と少しく趣を異にしてをるが、一種面白い宗教がある、それは學者がトテム崇拜教 Totemism と名づけた所のものであつて一種の動物稀には植物と、自分の種族との間に、或一定の血族關係を認めて、そこからその動物又は植物を崇拜する所の宗教である、則ち或一種族の祖先は熊なり狼なり一種の動物であつたとか考へて、今でもその祖先であつた動物熊や狼を大切にし、之を神として祭るのはトテム崇拜教である、日本ではアイヌ人の熊祭はトテム崇拜教の適例であるし、亞米利加印度人の中にこのトテム崇拜教が今尙熾に行はれてをる、我國では今日下等社會の人の名前に、熊公八公はちとちはちとちはちとちなど云ふは、トテム崇拜教に淵源してをつて、その宗教的意味を今日では忘れてしまつたのではないかと思はれる、又下等社會の人例之大工左官仕事師など

の文身モウシに龍などを彫つてをるのも又トテム崇拝教の遺物では無からうかと思ふ。

以上は主として文化の劣等な人類の崇拝してをる所の宗教であるから之を劣等人文教と名づけて置いたが、之より文化の程度が稍高等になると、私の所謂高等人文教と云ふものが現はれてくる。然しこの高等人文教と云ふ中には、色々種類があつて、一概には論じられない、則ち等しく高等人文教と云ふ中に於て又非常に程度の高いものと低いものとの間には、大なる懸隔があるので、私はこの違を凡そ三段に分けて考へやうと思ふ。高等人文教中でもその最も低度のもので、最下級に在るものは、之を神話シワタ的と名づけ、之に次ぐものを律法リツポフ的とし、最後に發達の頂點に在るものを倫理リンリ的と名づけるのである。先づその神話的と云ふものから説明を試みやう、して又高等人文教になると、その宗教で崇拝される神様の形式が判然として一定して來て、佛教の如來阿彌陀基

督教のゴッドのやうに、崇拝の對象が劃然として現はれてくる。劣等人文教に見る様な人魂の様にフワフワ然とした神はなくなつてしまふのである。換言すれば神格不確立の劣等人文教は神格確立の高等人文教に進化して來たのである。

以上説明した劣等人文教が稍發達してくると云ふと、何れの國に在りても皆神話即ミスミythと云ふものを形作つてくる。古來神話を以て第一位を占むるものは希臘の宗教であるが、古代印度の宗教も亦その一例である。則ち神の天地創造の話だとか、神々間の結婚の談だとか、神々間の戦争譚だとか色々様々の物語が出來てくる。此物語を神話と稱するので、神話は畢竟知識の幼稚な古代の人類が有してをる世界觀セカイカン人ニ生觀ニの發表である。日本では古事記の如きは開卷先づこの神話を以て充されてをる。勿論この神話の發表する有様は國に由り人種に由りて自ら有様を異にしてをる。希臘人印度人の様に崇大優美な神話を有し

てをる人種もあれば、支那人猶太人の様に餘り神話を造る創見に富ま
ない、落窶たる思想の人種もあるが、兎に角多少の神話を有してをらぬ
人種はないのである、その中殊に神話的宗教の標本としても云ふべきは
希臘人であつて、その神話の豊富にして婉曲多趣なる實に古今獨歩で
ある、希臘の詩人ホメーロスのイリアッド、オデッセーの二大詩篇の如き
は、皆こゝに材料を取つたのである、その宗教は實に純乎たる多神教の
形式を以て現はれ、多神教の形式は遺憾なく希臘の神話的宗教の中に
發達をしてをる、それであるから私は之を純多神教 Pure polytheism と
呼んだのである、然るに古代印度の神話的宗教即ち韋陀 Veda の宗教に
なると、多神教は多神教に相違ないけれども、餘程その有様が違つてを
るので、其爲めに學者は之に單一神教 Henotheism 又は交替神教 Kathen-
otheism の名稱を與へてをる、則ち印度の古代宗教即ち韋陀の宗教に於
ても、インドラ Indra とかアグニ Agni とかアスラ Asura とか神は澤山に

存してをるが、然しその神に對する信者の心持ちが希臘の純多神教と
は餘程趣を異にしてをるので、あつて、韋陀の宗教に於ては信者がイン
ドラならインドラの一つの神を崇拜するときには、その時に限つて恰
も他の神々は世に存在してをらない心持ちで、その一神に葵向し歸依
するのである、又之と時を異にしてアグニならアグニを禮拜するとき
には、アグニ以外に神はない様な氣になつてアグニ一神に一向專念に
廻向するのである、斯く一時崇拜する神が單に一に限るから學者は這
種の多神教のことを單一神教と名けたのである、してかやうに或時は
インドラ又或時はアグニと云ふ様に、その葵向する神が時々變はつて
行くから、又之を交替神教とも呼ぶのである。

然るに猶太人即ちイスラエル人種の間に現はれた宗教に於ては、神
話的の分子が非常に少い、今日バイブルの舊約書創世記の中に残つて
をる有名な天地創造の神話の如きも、餘程後世バビロニアあたりの他

國の思想に影響されて出来上つたものである。斯くイスラエルの古い宗教には希臘人の間に見る様な豊富婉麗奔放飄逸な神話は無いが、イスラエルの神エホバ Jehovah 即ちヤーエー Yaweh の古代宗教はその思想の幼稚なる丁度希臘印度の神話に相當するから、こゝに之を神話的宗教の中に列したのであつて、その宗教の形式は印度の單一神教ともう一層嚴密にした様なものである。由つて學者は之を拜一神教 Monolatry と名づけてをる。則ち單一神教では同一信者が唯或一定の神を崇拜する時丈他の神のとを心に思はないのみであつて、他の時に至ればその同じ人が又別の神に向祈願すると云ふ様な風であるが、拜一神教ではさうでなくつて、イスラエルと云ふ同一國民の崇拜する神は、唯、ヤーエー一神に限つてをるので、他の國民はどんな神を崇拜しやうと、それには構はない。他の國民には各その國民に固有な守護神があらうが、その守護神迄も神に非ずと排斥する譯ではないか、イスラエルと云ふ

一國民の崇拜する神は、ヤーエー唯一神に限るとかう主張するものが、拜一神教である。それであるから拜一神教は又國民的唯神教 Nation-en monotheism と云つてをる。然るにそれが一步進んで来ると云ふと、天上天下中外に亘りて神と云はるゝ所のものは唯一に限る國を異にするに従つて神も違ふと云ふ譯はない。神は洋の東西を問はず國の内、外に論なく、普天の下率土の濱到る所唯一つ有るきりであるとかう云ふ様になつてくる。かうなれば拜一神教即ち國民的唯神教は一步を進めて純然たる唯神教 Monolatry になつたのである。猶太教から發達した基督教は、是れである。基督教に至つてイスラエルの宗教はその最終の發達を遂げたものと謂はなければならぬのである。

かやうに神話時代を經過してくると、次には律法的時代に達するのであつて、色々やかましい宗教上の法則、掟、即ち戒律などが設けられて一厘一毫も之に背く譯に行かないと主張し、その煩瑣なる戒律を嚴守

するのが取りも直さず宗教であると解釋されてくる。猶太教の中でバ
リサイ、ザドカイ教徒の如きは此好適例であるし、印度では婆羅門教の
八釜敷戒律は皆是れである。従つてその宗教は單に形式の末に流れ外
形の虚禮にのみ奔りて、精神の本義を忘れ去つてしまふと云ふ弊害に
陥り易いのである。此階段に在る宗教は道德と云ふことを尊び、宗教と
結び附いた道德が戒律の形を取つて現はれて來たのである。その精神
の在る所を深く察しないうて徒にその法規法則ばかりやかましく云ふ
に止るからその宗教は化石の如く眞に偽善に陥つてしまふのである。
換言すれば此階段の宗教は道德と云ふことを重んずるとは重んずる
けれども、その道德の嚴守は全く自律的 *Autonomy moral* に出たのでな
く、信者は戒律即宗教法に由つて束縛されて一向他律的 *Heteronomy mo-*
ral に道德が行はれると云ふ有様である。此の點に於て基督教に後れて
亞刺比亞に起つたモハメッドの回々教も、律法的たることを免れない

のである。然るにこの律法的の傾向を更に一步進めて宗教を以て自律
的の位置に高め、心の清きものは福なり(馬太傳五)と説き、自淨其意是諸
佛教(法句經)と教られた耶蘇や釋迦の宗教に至つては、其宗教は純乎た
る自律的道德の宗教となり、倫理的宗教の極致に達したものである。基
督教や佛教を以て倫理的と云ふのは實にこゝにあるのであつて、其中
に含まれてをる倫理道德の要素が他律的でなくして自律的であつて、
道德が最も發達した形式を以てその中に現はれてをると云ふ意味で
以て、倫理的と稱するのである。決して倫理即宗教と云ふ様な意味では
ない。詳しく云へば五倫五常など云ふ世間の道德を實行するその儘が
即ち宗教であると云ふ意味ではない。即ち道德とは違つた天地に佛教
なり基督教なりの本領は無論存してをるのである。この點は能く御注
意を願ひ度のである。そこで等しく基督教と云ふ中でもバイブルの三
福音書に現はれた様な教主耶蘇の考に、近い基督教即耶蘇の基督教

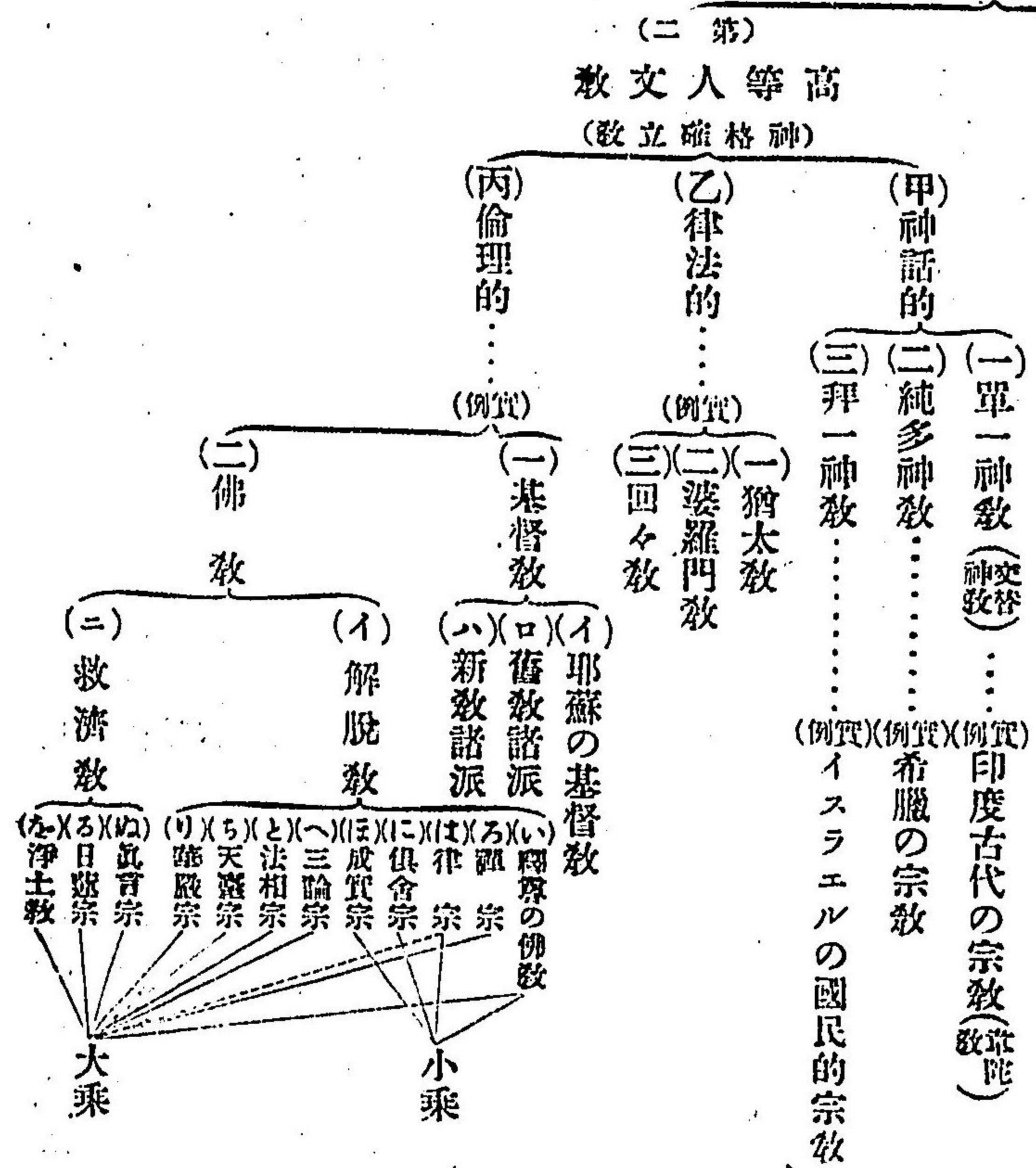
もあれば、希臘加特力や羅馬加特力の様な舊教もあるし、又等しく佛教といふ中に於ても、自ら之を二種に分つことが出来るので、その一は自力解脱を主張する自力教又は解脱教である、他は他力の救済を教ふる他力教又は救済教である、前者は佛教の教主釋迦の宗教を初として、禪宗、律宗などから、俱舍成實三論法相天台華嚴の如き哲理を主とする佛教之に屬し、後者は眞言宗日蓮宗等を初として、淨土宗眞宗等の淨土諸宗即ち淨土教之に屬するのである、して又佛基兩教を問はず、今是等の諸宗派の性質を一々申し述べてをる餘裕はないからその詳細は之を畧することゝするが、兎に角是れ等の宗教が倫理道德の至純至粹なるものを鍾め來つて宗教としては最終極致の發達を遂げたものであると云ふことを記憶して置かねばならぬ。

以上説明して來た所に由りて世の中に存在してをる宗教がその數幾百千有るにも關らず、その發達高下の順序に照して、簡單より複雑に

進む所の諸階段に應じ、その分類種分けをして見たので、こゝで以て宗教の標本となる所のものは自ら何種あるか、その種類は如何なるものであるかと云ふことが、大體明瞭になつたと思ふ、それは尙世の中に實際存在してをる動物はその數番に千百のみではないが、之を進化發達の順序に照し二三の標本を擧げ來つて、劣等より高等に進む有様に山つて種分けをして見ると、自ら動物は如何なる種類から成り立つてをるか、その性質は如何と云ふことが明になると同一である。そこで以上述べた諸宗教を、一目の下に瞭然たらしむる爲め、左に之を分類表にして示して置かう。

- (一) 物活教
 (二) 初步の天然崇拜教
 (三) 精靈崇拜教——祖靈崇拜教(祖先教)
 (四) 咒物崇拜教
 (五) トテム崇拜教
- (一) 劣等
 (二) 人
 (三) 文
 (四) 教
- (一) 第 (二) 等 (三) 劣 (四) 等 (五) 教
- (教立確不格神)

宗教



以上宗教の發達階級の段と孔子の思想

備今以上述べた宗教の發達階段を、孔子が自家思想の發達程度を表
 白して、吾十有五而志于學三十而立四十而不惑五十而知天命六十而耳
 順七十而從心所欲不踰矩論語と云はれたものに比較して見ると、先づ
 初めの劣等人文敎は宗教發達の初段であつて、孔子が吾十有五而志于
 學と云はれた、その十有五と云ふ最も初歩なる思想の階段に相當して
 せる、然るに三十而立と云はれた時代は、丁度宗教が神話的時代に遁入
 つたので、神格不確立の劣等人文敎は神格確立の高等人文敎になつて
 來たものに相當する、して又孔子が四十而不惑、五十而知天命と云はれ
 た時代は、丁度彼律法敎が如何にも些末の形式迄も神命として奉じ、戰
 々競々一意専心神命に惟違はざらんことを恐れ、萬事を神慮に一任し
 天命を畏れ、天命を待つてをると云ふ時代に該當してをるのである、然
 るに尙一步を進めて宗教の最後の發達である佛基兩敎を見ると云ふ
 と、その發達は最高圓熟の境に出入して、孔子の所謂六十而耳順七十而

従心所欲不踰矩の妙境に進達し、信仰圓熟の老境に安住したものと謂はなければならないのである。

次に、以上諸宗教の發達の階段を以て、中世の神學者聖ベルナルズ Bernardus が自愛と他愛、世俗的道德と宗教的道德との差違を四種類に分けて觀察したものに比較して、宗教の劣等から高等に進む進化發達の跡とその種類とを調べてみやう、則ち聖ベルナルズは先づ第一人は己の爲めに己を愛す、第二己の爲めに神を愛す、第三神の爲めに神を愛す、第四神の爲めに己を愛すとかう云つてを、その第一の己の爲めに己を愛するのは純利己主義であつて、少しも宗教と云ふことに指を染めたことのない所謂無宗教者の事であるからこゝには九て論外であるが、第二己の爲めに神を愛すと云ふのは、宗教的意識の發達から云へば丁度劣等人文教と神話的宗教の二時代に相當するのである、此時代の宗教は皆自分の利己心に驅られて宗教を奉ずるので、神を頼み

神を信ずると云ふことも、一に自分の利益を計る爲めであつて、神に供物を献じてその報酬として色々の御利益を得やうと考へてをるので、縦令神を愛してもそれは自分の爲めに愛するので、最も下等な宗教心と言はなければならぬ、尤も之を無宗教者が我利々々でもつて、佛とか神とか云ふことに少しも頓着なく、自ら恣にして放逸無慚なるものに比ぶれば、多少優つてはをるけれども、宗教信者としては、最劣等の階段に在るものと云はなければならぬ、併し俗にも苦しい時の神頼みと云ひ宗教を信ずるものも多くはかう云ふ氣で以て神を頼み、佛を念ずるのであるから、どうもその結果宗教が卑しい私慾を充す道具となると云ふ様な有様に墮落してしまふのである、彼盜賊が自己の犯した罪惡の現はれない様に、又家人の眼を覺まさぬ様にと、一心に不動様を念じて、土藏破をやる如きは、此極端なる實例である、猶太の預言者ホセアが神を喜ばずのは、血醒さい、牛羊の犠牲ではなくつて、慈哀の心

である。と云つたのも、又前に挙げた法句經の中に若人壽百歲勸事天下
 神象馬用祭祀不如行一慈と云はれたのも、全く是等の事を誡められた
 のである。この最下等なる宗教心の一步進んだものは、所謂

正直の頭に神宿る

とか、又は

心だにまことの道に叶ひなば

祈らずとも神や守らん

の一首の中に現はれてをる宗教心の階段になつてくるのである。之に
 反して盜賊が自己の犯罪の暴露するのを恐れて、不動様に祈願するな
 ど云ふことは、以ての外のことと、神様がどうしてこんな祈を聞いてく
 れませうぞ、又無名の師を興して無辜百萬の生靈を犠牲に供し、東洋否
 世界の平和をも破つて、獨り天下を併呑しやうなどと云ふ野心の爲め
 に、天に在す父なる神に祈禱を捧げる基督教の皇帝もあるさうですが、

神様は決してこんな祈禱は聽いて下さらないのである。至誠神に通ず
 と云ひます、我心に至誠のないのにどうして神に通ずることが出来ま
 しやうぞ、是等の人に對しては

心だに誠の道に叶はずば

祈つたとも神や守らん

の一句を以て、その頂門の一針に加へたいのである。古來からかういふ
 連中に由つて高尚な宗教が汚された場合が少くないのは、遺憾に堪へ
 ない。然るに己の爲めに神を愛すると云ふ利己的宗教心が一步進むと
 云ふと、自分のことは直接念頭に置かないで、神の爲めに神を愛すと云
 ふベルナルツスの所謂第三の階段に進んでくるのである。この時代は
 丁度律法的宗教の時代である。律法的宗教の時代では一意専心神命是
 れ奉じ、一厘一毫も違つてはならぬとかう思つて、戒律戒法を嚴守する、
 否寧ろ之に拘泥して變通の利かぬ位に迄やるのであるから、自分とい

ふ利己の精神は殆ど外部に見えなくなつてしまつて、なんでも戒律の爲めに戒律を行ふと云ふ位になり、宗教の爲め神の爲めと云ふことの方が遂に自分のとより主になつてくる。則ち神の爲めに神を愛すと云ふ境界に到達して來たのである。かやうに先づ利己と云ふものを捨て、神の爲めに神を愛すと云ふことは至極結構なことである。人は己の爲めと云ふ利己心が先にたつてどうもならぬものであるのに、己を空うして進んで行くと云ふことは至極よい、宗教心の開發された徴候であるが、尙も一歩進みたいのである。それは外の事でもない、ペルナルヅスの申した神の爲めに己を愛すと云ふ境界である。神の爲めに己を愛すと云ふことは至極容易さうであつてその實さうでない、神の爲めに神を愛すと云ふことは無論六ヶ敷こととて、修養を積んだものでなければ出來難いことに相違ないが、神の爲めに己を愛すと云ふことに比べると比較的はまだ、實行が仕易い。是は丁度世の中に禁酒と云ふ

とは比較的容易であるけれども、節酒と云ふことになるかと却て六ヶ敷い、ちぎ大酒飲みと云ふ本の木阿彌に戻つて仕舞ふと同一である。神の爲めに己を愛すと云ふことになる、中々仕悪いのである。則ち神の爲めに己を愛すのも、己の爲めに己を愛すのも、その外形上に現はれた所から云へば同じである。共に自己を愛するのであるけれども、その精神の點に至つては天地霄壤も管ならず雲泥萬里の相違がある。眞の宗教信者もその己を愛すると云ふ外、形丈は決して一般の人、無宗教者と違がないのである。然し、その己を愛する精神に立ち至つて、一つ考へて見ると、云ふと己の爲めに己を愛するのではなく、神の爲めに己を愛するので親鸞聖人の所謂攝取心、常照護の中の生活と云ふ信仰の下に、又保羅が云つた様に我は神の中に動き生きさうして在るものなりとの信仰の下に今日一日の義務も、どんな下賤の仕事も皆神の命じ給へる天職を完うする爲めの行爲である。神の爲めに生きながらへてをる

その己を愛すと云ふ點、その外形丈は同一であつても、その愛し方、その心得方、その結果は、非常なる相違になつてくるのである。こゝが宗教に根底を有つた道德が、世俗的道德に勝つて、効果の多い點である。してこのベルナルズが第四の階段即ち最後の階段として擧げた神の爲めに己を愛すと云ふその境界は、佛基兩教の中に於て、今云つた様に實際實現されてゐるのである。實に佛基兩教に至つて宗教の發達その最終の點に到達したものと謂はなければならぬのである。

是れ迄述べて來た所で宗教の種類が分り、宗教發達の各階段に照して一々その標本となる所の者を擧げて話したから、是れに由つて自ら宗教の何物なるかは略分つたのであるが、今便利の爲め宗教と云ふことを一言に概括して云つてみれば左の通りである。

先づ宗教を客觀的に定義すると

宗教とは神的なるもの The Divine と人との關係である。

とかう云ふことが出来る。こゝに云ふ神的なるものとは、必しもバイブルに云ふ様な人格的の神に限つたことではない、精靈崇拜教に見る様な人格などのない所謂神格不確立の先祖の靈魂でもかまはぬ、又釋尊の涅槃 Nirvana の様な道德的色彩を帯べる一種の理想即倫理學の所謂最高善 Summum Bonum の如きものでもよい、又禪宗に云ふ心即ち涅槃妙心と云ふ様なものでも差し支へないのであつて、有形無形を問はず畢竟吾人を導く所の一種の力となるもの、此に之を名けて神的なるものと概稱したので、この神的なるものと人との關係上に宗教は成立してゐるのである。唯進んだ宗教即佛基兩教の如きものに在りては、この神的なる者の考が發達して來て居つて、宗教の精髓を最も能く表はしてゐると云ふ丈である。して又宗教として實際の役に立つ表はれ方としては、その對象を基督教や淨土教の様に人格的に寫象する所に在るのである。

若し又宗教を信ずる信者の精神状態から見て、宗教を定義すれば、

宗教とは人間最終の安心立命である。

とかう云ふことが出来る、詳言すれば人が裏に深く信ずる所があつて、その精神上に大安心を得死すとも變らぬと云ふ精神状態に到達したものは宗教である、若し之を學問的に云ふならば、宗教は究竟の證信 Ultimate conviction であると云ふことになる、して又宗教として最も實効があり、宗教の標本的發表である他力教則ち別の言葉で云へば救済教に於ては、その所謂宗教の對象即ち本尊は人格的に表出され、従つて宗教の對象たる神的なるものは即ち神と云つて差し支へないのであるから、他力教又は救済教に就て云へば、宗教とは客觀的には神と人との關係であるとかう定義してもよいのであるし、又主觀的には宗教とは信賴 *Entrust* と云ふ信仰 *Faith* の状態であると云ふことが出来るのである。

第二講 宗教と迷信の別

ペーケン——百語上迷信と宗教の區別——迷信とは何ぞ——一種の知識——如何なる種類の知識であるか——科學上の誤謬と迷信——宗教上その理論の誤謬と迷信——迷信の本性——迷信の定義——迷信判定の道德標準說——迷信判定の法律標準說——迷信を判定する實際上の標準——反對論者の批難——歸結

ペーケン

フランシス、ペーケン *E. Bacon* は宗教と迷信の關係を述べて、宗教と

迷信はその外見如何にも能く似てをすることは、人間と猿とが能く似寄つてをるが如き者である、然し外見如何に似てをしても内實非常に違ふものがあることは、又丁度人と猿とが外見は如何に似てをしても、その實非常に違ふ所があると同一である、と云ふことを云はれたが實に禮記の中にも在る通り、*猩々能言不離禽獸*、どれ程猿が人間に似てを、つても猿と人間とは同じものでない様に、迷信と宗教はどれ程能く似

てを つても畢竟同一物でない。

先づその證據には、近い例を取つて考へて見ても直分ることであつて、言語の上にも一方は迷信一方は宗教と云ふ様にちやんとそこに相違が存してをる。之は獨り日本語ばかりではない、英佛獨等の言葉の上から云つても、皆迷信と宗教とは言葉が違つてをる。則ち英佛の言葉では迷信は Superstition と云ひ宗教は之を Religion と云ふてをる。又獨逸の言葉では迷信のことを Aberglaube と云ひ宗教のことを Religion と云ふてをる。斯くちやんとその言葉の上にも違がある。名實の兩者は全く無關係のものでなく、何かその間に關係がなければならず、又今云つた通り日本語を初め英佛獨等の語でも、迷信と宗教とを各違つた言葉で云ひ現はしてをる以上は、何かこの二の間に事實相違があるに違ない。之に反して若し全く同一のものならば、何を苦んで迷信とか宗教とか云ふ様に、各違つた言葉で呼ぶ必要があらうか、それがかう云ふ風に各

違つた言葉が自然に生じて來た所を以て考へて見ると、この兩者の間には何か違つた點が無ければならぬ、縱令如何に能く似てをつたからと云つても、どこかに違が無ければならぬと思はれるのである。宗教と迷信の間には、所謂狸々能く言つて禽獸を離れず、と云ふ位の違は確に有るだらうと思ふのである。

かう云ふ風に考へてくると、然らば迷信とは一昧何であるかと云ふ問題が起つてくる。この問題に答へて私は先づ迷信とは一種の知識であると言はうと思ふのである。何故ならば迷信と云つても何かの事を迷ひ信ずるのであつて、苟も自身それを信ずる以上は其は確な事實であるとかう確認するからの事である。例之天理教や逆門教の信者が腐つた御神水に迷信して、之を戴けば病氣が平癒するとかう確認してそれを戴く以上は、其人の心では御神水は病氣平癒の効力ある者なりとの判斷に由つてその御神水を戴くので、迷信も畢竟判斷の形式に現は

る、ものであるから一種の知識であるに相違ないのである既に迷信は一種の知識であると云ふことは分つたが然らばそれは如何なる種類の知識であるかと云ふことになる、中々込み入つた議論をしなければならぬが先づその大體を左に述べて見やう。

全、躰、迷、信、と、謬、つ、た、理、論、と、の、差、別、は、何、處、に、在、る、か、と、云、ふ、と、を、述、べ、や、う、則、ち、彼、の、ニ、ュ、ー、ト、ン、と、云、ふ、人、は、物、理、學、の、泰、斗、と、し、て、有、名、な、人、で、あ、る、と、は、何、人、も、知、つ、て、を、る、こ、と、で、彼、の、林、檜、の、落、ち、る、の、を、見、て、引、力、の、法、則、を、發、見、し、た、と、云、ふ、有、名、な、話、の、あ、る、人、で、あ、る、實、に、ニ、ュ、ン、ト、ン、は、か、う、云、ふ、有、名、な、物、理、學、界、の、大、家、で、あ、つ、た、け、れ、ど、も、光、線、の、理、を、説、明、す、る、學、説、に、於、て、は、ニ、ュ、ー、ト、ン、も、今、日、か、ら、見、れ、ば、非、常、に、誤、つ、た、判、斷、を、や、つ、て、居、つ、た、の、で、あ、る、則、ち、其、見、解、は、光、素、説、と、云、ふ、の、で、あ、る、が、太、陽、な、ら、太、陽、と、云、ふ、發、光、躰、が、あ、れ、ば、そ、こ、か、ら、光、素、と、云、ふ、光、線、の、微、妙、な、元、素、が、飛、ん、で、來、て、そ、れ、が、人、の、眼、に、這、入、つ、て、そ、こ、で、人、は、光、を、感、ず、る、の、で、あ、る、と、か

う云ふ風に光線の現象を説明してをるのである、然るに今日にてはニュートンの光素説は全く誤つた見解であると云ふとが分つて來て、今日ではエーテルの波動説——此説も最近多少變化して來たが先づこのエーテルの波動説を以て光線の現象を説明するとなり、光と云ふのはその光を發する發光躰から、特に光素と云ふ光の微妙な元素が飛び出して來て、吾人の眼中に這入つてそこで吾人が眼に光線を感じるのではなく、光線は全くエーテルの波動に基くのであると、かう解釋されて來た、すると如何に物理學の大家であつても今日進歩した物理學上の見解から見れば、ニュートンは光線の原理に關して誤つた見解を有してをつたと云はなければならぬ、併し成程ニュートンは理論上誤つた見解を有つてをつたにせよ、この場合に於て、ニュートンは光線學上の迷信を有つてをつたとは、普通云はないのである、ニュートンの光素説は天理教の信者が腐つた御神水に病氣平癒の効力があると思

つてをる迷信と同一に迷信だとは呼ばないのである。して見ると學問の理論上誤つた見解を有してをつても夫を直ちに迷信呼ばりはし無いのである。してこのニュートンの光素説の例は、宗教に、毫も關係のない物理學と云ふ學問上の一實例であるが、之が宗教に關係した學問でも、學問上の理論の誤謬は決して之を迷信と呼ばないのである。例之ば佛教中法相の學問では、吾人の精神を區分して八識とし、その第八識である阿頼耶識と云ふのに、天地萬有森羅の諸象を開顯すべき種子が存してをつて、その種子から天地萬有が現はれるとかう説くが、扱其種子は阿頼耶識と云ふ吾人の心が、後天的に經驗から得たものであらうか、但しは又阿頼耶識が本來先天的に固有してをつた者であらうかと云ふ議論が八ヶ問敷かつた時、護月と云ふ人は一切の種子は皆阿頼耶識に本來固有してをると説き、難陀と云ふ人は一切經驗から得たのであると主張した、然しこの二説は何れも極端説であるを免れないか

ら、護法と云ふ人は折衷説を立て、一半本有一半經驗と云ふとを主張した、して今日でもこの護法の折衷説が善いとされてをる、斯く護法の折衷説が眞理であるとせられたからと云つて、直に護月の先天説や難陀の經驗説は迷信だとは云つてをらないのである、して見れば事、宗教に關しても、かう云ふ風に理論に關係した判断の謬は、之を謬つた知識とは云つても決して迷信とは呼ばぬとを普通としてをるのである。

以上云ふた所から考へて見ると、宗教に關係ない科學上の誤謬は勿論、宗教に關係あるとでも理論上の判断の誤謬は之を迷信と呼ばないのである、然るに宗教上の判断の誤謬であつて、それが直接人生の實際に影響して來ることになると、その謬つた判断は之を迷信と稱する様になるのである、前に擧げた例で云ふならば、天理教や蓮門教の信者が腐つた御神水に病氣平癒の功力ありとの宗教上誤つた判断からして、病氣をしても醫藥を却けて用ひず、唯腐つた御神水ばかり飲んでをつ

て、その結果人間に貴重なる生命を失つて自ら悟らざるものあるときは之を迷信と稱するのである。又神前に供へてある花瓶中の花が、神主の御祈禱最中に動き出すのを見て、神の靈驗あらたかなるの致す所であると思つて、信者は隨喜の感涙に咽んでをる姪祠邪教の迷信家があるけれども、花の動き出したと云ふのは、その實神主がこすくて信者の注意を惹く爲めに花が御祈禱半に動き出す様に豫め鱗を花瓶の中に入れて置いて、それに酒を注いだものだから鱗が苦しくなつて、花瓶中で動き出した爲め、神前の花瓶の御花が動き出したのである。然るにそれを悟らないで、神が御祈禱を聞いてくれた證據だと信じて、信者は神主に少からざる金錢を巻き上げられ、その結果自己の資財を盡盡して尙悟らずと云ふ如き、宗教上の判断の誤謬から延いて人生の實際上に影響を及ぼして來る時は、世その誤れる判断を稱して迷信と云ふのである。彼の物理学と能く似た天文学即ち星學上の事柄に關しても、それ

が時にとつては、又迷信となるのであつて、則ち星に關した知識の義であるアストロノミー即ち星學と云ふ科學が轉じてアストロロジー即ち占星術と云ふ宗教の着色を帯びたるものとなり、星の出沒隱見に徴して人間の運命を卜ひ、吉凶禍福を占斷して方角の善し惡しなどを説いて、人生の實際を律して行くと云ふことになる。その占星術なるものは之を迷信と稱するのである。して見ると迷信は一種の知識であつて、則ちそれが誤つた判断に相違ないのであるが、ニュートンの光素説の様に學問の理論に關したものでなく、又宗報上の事項でも彼の法相宗の阿頼耶識と種子との關係論の如くその理論に關したものでなく、天理教や占星術の場合の如く、人生の實際に關係した宗教上の判断の誤である。と云ふことが分つたのである。併し尙此に注意すべきことがある。それは人生の實際に關した判断の誤謬とかう云つても、必ずしも人生の實際上に惡結果のみを來すものである、と斷言することは

出来ない時に此迷信がある爲め、道德上などに好結果を來することがあると云ふことである、併し多くの場合に於て迷信の結果はその影響する所惡結果を來すものの方が多いのである、上に擧げた天理蓮門の淫祠邪教の如きその適例である、中には藥でも飲ませて其看護宜を得ば平癒すべき病人をも、迷信の爲め所謂行者なる者を招いて、靜謐にしてをる可き病人の枕邊で、大聲擧げて御祈禱をしたり、護摩の烟で病人を窒息せしめたりして、遂に死に至らしむる實例は決して少くないのである、是等は皆迷信が人生の實際に及ぼす惡結果の場合であるが、今日吾人の眼から見て全く迷信に相違ないと思ふものがあるにも關らず、是れあるが爲に非常にその人の徳性を高尚にし宗教の爲めに働いた一つの實例がある、それは有名なる保羅の場合である、今日基督教が歐羅巴の宗教となつたと云ふものは、その淵源を探ぐれば、全くその昔異邦人の使徒保羅の献身的布教に濫觴してをるのであつて、此點に於

て吾人は大に保羅を徳としなければならぬのであるが、保羅をして宗教上に此大飛躍を試みしめた一つの原因と云ふものは、全く保羅の有つてをつた迷信の力であると云つても差し支へ無いのである、則ち保羅はその當時一般に基督教信者間に行はれてをつた、此世界の亡滅は近きに在りと云ふ迷信を有つてをつて、その迷信の爲めに獨身説を主張した、保羅は、もう直此世界が滅亡するものならば、徒に結婚をして一家の謀を成さんよりも、一生獨身で暮らして繫累を絶ち、神の道の宣傳に努めた方が善いと云ふ考から、その獨身説を主張し、さうして保羅が獨身で繫累が無かつた爲め、彼か如き偉大なる宗教上の大活動大飛躍が出来たのである、最も保羅の獨身説には二つの理由があるので、その一は今云つた宗教上世界の滅亡は近きに在りとの迷信の結果から來てをると、その二は迷信ではない真正の理由であるが、それは宗教家は献身的事業に従事するものであるから、繫累を絶つ爲め獨身の方

が善いと云ふ考である。此第二の考は今日尙多くの宗教家の執る所の見解で、決して迷信ではない至極正しい考であるが、その第一の者則ち世界の滅亡近しとの前提からやつてくる獨身説は遂に迷信たるを失はないのである。何故ならば保羅歿してから既に二千年に垂々としてをる今日尙世界は亡滅しさうにも無いのに、保羅はもうすぐにも世界が亡滅してしまひさうに思つてをつたさうしてその結果獨身説を主張した、少くとも氏の獨身説の一半は信仰上この世界の亡滅近しとの迷信から來てをる、而もこの迷信の結果彼は道德上宗教上實に立派な活動をやつてをるのである。して見ると迷信の結果は必ずしも皆が皆人生の實際上に悪結果を來すと云ふ譯ではないが併し事實上多くは好結果を來すと、は甚僅少であつて、却て事實上多くは悪結果を來たすのである。前に擧げた天理教逆門教などが、腐つた御神水を以て醫藥に代へるが如き、占星術が方角運命などを八ヶ釜敷云ふ爲め、その迷信家

は世界を股に懸けて大飛躍を試み、人間到處有青山の意氣を以て、毎年々々自由に遠方の國々と通商なり殖民なりをやつて自己の使命を全うすべきに、それをも能く果さず、やれ本年は八方塞だとか、それ今年は丑の方が悪いとか、な、此年は年回が悪いとか云ふ様なことを云つて、人生の實際上に非常な不結果を來す様な事實が續々起つて來る、是等は迷信を有する爲め、人生の實際に悪結果を及ぼした實例である。實に迷信がある爲め、却て保羅の様に善良な結果をその實行上に來したのは珍らしい特例である。否、保羅も實は他の迷信でない信仰からその一半を輔けられてをつたのであるが、十中九分九厘迄は迷信は人生の實際に悪結果を來すのである。善く考へて見ると實はそれもその筈で、正しい信仰を有つて居てこそ、道德なり何なりの上に即人生の實際上に善良なる結果を來しこそすれ、間違つた迷信からしてはどうして人生の實際に善良な結果が出來やう等がないではないか、若し迷信でかや

うに善良な結果を生ずることが必ず常に出来ると云ふことなら吾人は學問して正しい知識を研き修めると云ふことも實は必要の無いことになつて来て、眞正なる知識を求め、爲めに學問研究に出精すると云ふことが誠に無意味になつてしまふのである。して見れば迷信が却て人生の實際に善良なる結果を來したと云ふ保羅の場合の如きは寧ろその除外例であつて、概して之を云ふ時は迷信は人生の實際に悪影響を興へるものであると云ふ可きである。そこで今以上論明した所を一括して迷信を定義してみれば先づこんなものであらう、則ち迷信とは人生の實際に直接に影響主として悪しき影響唯罕には善き影響ある宗教上の謬れる知識であると云ふことが出来やう。

此處迄論じて來れば既に分つてをるのであるが、世には宗教と迷信を區別するに學問上の知識に由らないで、さう云ふものはそつち除けにして置いて、一向道徳に合ふか合はぬかと云ふことを以て迷信と眞

正の宗教との別を立つ可しと論ずる人があるが、是は大なる間違で、縱令道徳に合つたからと云つても、保羅の獨身説の様な宗教上の迷信から來てをるものがあるから、唯道徳に合ふと云ふこと丈では十分迷信と正信、換言すれば迷信と眞正の宗教とを區別する標準とすることは出来ないのである。勿論道徳に合ふと合はぬとは迷信であるか正信であるかと云ふことを區別する有力な参考になるとは勿論であつて、迷信は多くは有徳なる結果を持ち來す可き筈がないのであるから、迷信と正信を區別するに道徳に合ふか合はぬかと云ふことを以てその一標準とするのは差し支へ無いのであるが、道徳丈で迷信、正信を判つ、唯一の標準とする譯には行かないのである。若しさうすると保羅の如き場合も迷信と判定することが出来なくなるからである。彼の自分の大切な子供を人身御供として、神に献じたり或は印度の年若き寡婦が自ら火に投じて夫の死に殉ずるが如き、之が古代近世の出來事たるを問

はず、皆宗教上の迷信から來るのであつて、従つて幼兒殺とか女の自殺とか云ふ如き不道德の結果を生じてをるから、迷信が多く不道德の結果を來すことは明かであるが、併し罕には保羅の如き場合が起つて來るから、道德丈を以て迷信正信を判つ唯一の標準とすることは出來ない、道德に合ふか合はぬかと云ふことも迷信と眞の宗教とを判別する一つの標準に相違ないが、是れのみを以て迷信と宗教を別つ唯一の標準とする譯には行かないのである、然る以上は彼の人々が相談に由つて便宜上決めた國家の法律の如きものを以て迷信と宗教を別つ唯一の標準とすることの出來ないことは申す迄もないことである、此の法律を以て迷信と宗教を判つ唯一の標準としたのは歴史上に於ては其有名な説であつて、近世英國の學者ホップスヌ Hobbes の如きはその代表者である、然し國家の法律が直に宗教の正信迷信を區別する唯一の標準とならないことは、常識で一寸考へて見ても分ることであつて、元來道

徳だの法律だのと云ふものばかり持つて來つて、迷信と宗教とを區別する唯一の尺度にしやうとするのは、恰も物差ぶちさを無視して獨り寒暖計ばかりで物の寸尺を計らうとする様なものである、成程嚴密に之を云ふときは寒暖計が幾何の氣温を表はしてをる時に、此物は何尺何寸あつたと、かう云ふのが精密であるので、嚴密に之を云へば氣温の變化に由つて物の長短に多少の増減の有ると云ふことは勿論であるから、此點から之を云へば寒暖計も實は物の寸尺を計るに必要に相違ないものであるが、併し寒暖計のみを以て物の寸尺を計る唯一の標準としやうと云ふ人が有つたら、吾人はその迂を笑はざるを得ぬのである、道德や法律のみを以て迷信正信を分つ唯一の規矩繩墨としやうと云ふならば、それは丁度寒暖計を以て物の寸尺を測定する唯一の標準としやうとするのと同じであらう、誰かその愚を笑はざらんである、全躰道德を以て迷信と宗教を判別する尺度にしやうとする思想は、科學哲學の如き

知識から宗教の批評難撃されるのを恐れて、全く科學哲學の如き知識に由らないで宗教と迷信の區別を附け、道德の名の下に宗教が科學哲學から蒙る攻撃を免れ、宗教の避難地を此に新設し様といふ底意柄出た考であつて、彼のカントが宗教を以て全く道德上の事項と解し、科學哲學の得て宗教に向つて鼎の輕重を云々す可きものでないと云つて、巧に宗教をして科學哲學の辨難攻撃を免れしめた考を、迷信の方面に遷して、迷信正信を判定する標準は一に道德に合ふか合はぬかと云ふことに在ると、かう主張したのであつて、要するに之は宗教の辯護の爲めに考出された見解で、カントは宗教を正[○]面[○]から積[○]極[○]的に道德の範圍に移して、科學哲學てふ知識の風波から避難せしめやうとしたし、今道德を以て迷信正信を別つ唯一標準としやうとする論者は、カントの反面[○]に立ちて消[○]極[○]的に宗教を庇曲し辯護しやうとする一種の宗派見に左右された見解と云はなければならぬのである、迷信を判定する標

準を道德に求むる見解が、一種かう云ふ宗派見から起つた特種の目的の爲め的手段である以上は、それが中正の考でない[○]と云ふとも亦自ら想見せらるゝので、ある、又彼の國家の法律を以て迷信と宗教を判別する唯一標準とせよと云ふホッブスの見解に至つても、大變可笑ので既に國家の法律と云ふ以上は、人の團躰を豫想してをるのであるが、かう云ふ團躰を豫想しないでも、則ち個人がたつた獨で住つてをつても、例之ロビンソンクルソーの様に絶海の孤島に獨在してをつても、その心に何か一つ確乎たる安心立命を持ち最終の信仰を得てをれば、それはその人の宗教であるが、かう云ふ宗教が果して正信であるか迷信であるかと云ふことを判別するには、國家の法律を以てすることは出来ない[○]ので、まだ國家は成立してをらぬから、従つてその團躰に必要な法律も出來て居らない筈であつて、此場合には法律を以て信仰の果して迷信であるか正信即ち真正の宗教であるかを判定する譯には行か

なくなつて来る、而も此場合に於てその人が心に確信してをる信念が、迷信であるか正信であるかを判別せずには、その信念を正信として確信する譯には行かないのである。若し迷信を判定する唯一標準が國家の法律に在るならば、其人は此場合には何を標準として、自身の信仰の正否を判別するであらうか、ホッブスの云ふ如くまだ國家を組織しなかつた以前に於て、その所謂虎狼の如く相争つてをつたと云ふ人間も、又その知識程度に於て或信念は之を迷信と判定し、或信念は之を正信として信奉してをつたに違ないが、その場合に於て彼等は何を標準として信仰の正否を判別してをつたか、是れ國家の法律を以て信仰の正否を判定しやうとする論者が、遂にその筈に窺む所であつて、此所論を追窮して行く時は、ホッブス自ら遂に自家議論の根底を失却するに至らざるを得ないのである。成程國家の法律で禁じた腐水を神水などと稱して、醫藥の代に用ひしむるのは、勿論迷信であるから、此點から之を

云へば國家の法律も、迷信正信を別つ一つの標準になること、尙道德と同一であるが、國家の法律は決して迷信と正信とを判決する唯一の尺度でないこと云ふことは明かである。元來前云つた通り、迷信も一種の知識であるから、之を判定する標準も、亦之を知識に求めんければならぬと云ふことは至明の理であつて、何も此點に於て、一派論者の様に宗派見に左右せられて、迷信と宗教を判つ標準に、科學哲學の如き知識を以てすることを、矢鱈に恐怖する必要はないのである。信仰の正否を判つ標準に、一方では道德や法律を以てするも結構である如く、他方では又科學や哲學の如き知識の光明にもたよらんければならないのである。之を要するに、迷信と正信を判別する標準は、一言以て之を云へば、時代知識と云ふの外、無いのである。則ちその時代々々に於ける科學哲學の理論より道德法律の制裁に至る迄、一切是等の時代知識即ち其時代々々の一切の人文現象は、迷信と宗教を判つ標準になるのである。例

之道德に戻らないことにしても、他の科學例之物理學又は天文學などの眼から見て迷信と云はるゝことがある、彼の保羅の世界の亡滅近づけりとの信仰の如き、則ち是れである、それであるから迷信と正信を判定する標準は、一言以て之を云へばその時代々の知識即ち時代知識又はその時代々の人文現象と云ふの外ない、併しその時その時代の知識又は人文現象と云つた所が、學問的に之を分析すると甚漠然たるものになつて、一躰どれがその時代々の知識であるか、それは一時代の下層人民の知識を云ふのか、學者の知識を云ふのか、學者と云ふ中ても、亦人に由つて多少違ふが、誰の知識であるかと云ふ様な批評の種が盡きないのであるが、極之を實際的に考へれば、何もさう目眩立てて大にあげつらふ必要も無いのであつて、その時代々の知識と云ふのは、其時代の一般の人が認めてをる(一)道德(二)法律(三)醫學——又は衛生(四)經濟(五)教育を初として他の一切の科學哲學等即(六)學問上の理論などを云ふので、その教ふる所を標準として迷信正信を決めれば善いので、以上の六種の知識に矛盾する信仰は迷信である、之に適合する信仰は正信である、真正の宗教であると、かう判定すれば、それで實際少しも差し支へないのである、例之ば神に人身御供と稱してその兒子を殺して奉るが如きは、昔は兎も角も今日の道德思想に矛盾するから迷信である、病氣の際醫藥を退けて、獨り腐つた御神水を飲んで病氣平癒を祈るが如きは、國家の法律の禁止する所、現今の醫學思想衛生思想の許さぬのみならず、學校教育の本旨に負いてをるから迷信である、又世界の亡滅旦夕に迫れりなど云ふ保羅の信仰の如きは、今日の科學思想に背反するものであるから迷信であると、かう判断するのである、斯く考察してくれば、迷信正信を判つ標準なるものも、實際は之を決定するに左迄困難なものではない。

かやうに迷信判定の標準を時代知識又はその時代々の人文現象

に求むると云ふときは、忽ち一難を起す者がある、則ちか様にするとき
は、知識は日進月歩一刻一刹那進歩しつゝあるものであるから、之を以て
迷信判定の標準とするときはその標準常に變化し、従つて昨日の正信
も今日の迷信と變じ、迷信と云ひ正信と云ひ常に一定したものの無きに
至らんと、然れど是れ常に變化あり活動ある活世界の真相上又實に止
むを得ざる事であつて、人知の性質上又如何とも爲し難きものである、
否一切の人文現象は皆活動的のものであつて、苟も此活動的の人文現
象を以て迷信判断の準據となす以上は、又止むを得ない事であると謂
はなければならぬ、併し一派論者の様に單に道德を以て迷信正信を判
つ唯一の標準とした所で、矢張り此不完全は免れないのである、何故な
らば道德も亦不斷變化し進歩しつゝあるものであつて、常にその進化
發達を極めないものであるからのことである、此進化發達止むことの
ない道德を以て、迷信判別の唯一標準と爲した所で、矢張りその標準に

變化ある以上は、之を大きくして唯その時代その時代の時代知識を以
てするも即ち一時代の人文現象を以てするも、左のみ違は無いのであ
る、何れにしても理論上昨日の正信は今日の迷信と化するに至るとの
有るのは勿論である、知識は一刻一刹那に進歩するものであるから、理
論上は實に論者の云ふ通りであるが、實際上には昨の正信は今の迷信
と云ふ様に、さう甚しい激變は常にある者でない、かう云ふ激變が常に
ある位知識の進歩が急ならば、社會の進歩上それは甚頼母しいのであ
るが、實際さううまくは行かない、寧ろ知識の進歩が半の歩の如く遅い
のを嘆息せざるを得ないのである、従つて實際上迷信正信を判別する
標準もさう急變するには至らないのである、唯永い時代を通して氷河
の滑る様にそろ／＼と進歩する者併し確實に進歩するものは吾人の
知識である、併し徐々の進歩にもせよ常に進歩して止まないと云ふ所
に知識の特色があり、將來永遠に發達す可き人文現象に向つて吾人は

無限の希望を屬してをるのである、して見れば時代知識の進化と云ふことは論者の如く左様に恐る可く悪む可き事では無くて、實際上から云ても又理論上から考へても大に喜ぶ可く慶す可き現象であると思ふ、時代知識や人文現象に此特性があるから、人類の希望も出来理想も生じて来て、天國を人世に實現しやうと云ふ大抱負大勇猛心も生じて來るのである、それであるから時代知識の進歩人文現象の發達と云ふものは、一派論者の如く是れ有るから迷信判定の千古不變の標準なしと謂つて嘆息し、惡魔の如く忌み嫌ふ可きものではなくて、寧ろ之に由つて宇宙攝理の精緻天公配劑の微妙を敬嘆す可きである、迷信正信の別が萬古一定して何等の變動もなく進化もなきものであるならば、それでは死んだ世界であつて、知識は彼の一定不變寸毫の流動なき池水の沈滞して遂に腐敗し去ると同一の悲境に陥るのである、吾人の知識や一切の人文現象が時々刻々進々化々して行つて、晝夜を舍めないと

云ふ所に、君子是を以て自強して息まざる進取向上の精神、努力精進の意氣を鼓吹されて來るのである、然れば迷信判定の標準が時代と共に進化することは論者の如く決して憂ふ可きことではない。

第三講 宗教と學術の一致

コムトとベーコン — 科學と哲學 — 哲學の根本問題と宗教の根本問題 — 哲學の究竟點と宗教の最終目的 — 哲學と宗教の心理的考察 — 宗教感情の批評 — 宗教の實驗實感説 — 哲學の對象と宗教の對象 — 科學の進歩と神話 — スターバック氏の宗教統計

コムト A. Comte と云ふ近世に出た佛蘭西の學者は、人知の發達を分つて宗教の時代哲學の時代科學の時代の三階段とし、偕云ふ様、宗教の如きは全く遠い々々昔の迷信に過ぎるのである、人知の發達と相伴はぬものである、今日は科學全能の時代で、宗教の如きは何等の用をも爲さぬ時代になつてしまつたとかう云つて、彼は學術一步を進むれば、宗教は一步を退き、斯くして學術の發達その極致に達すれば、宗教は全く世に跡を絶つに至るので、要するに宗教と學術は一致せぬもの、それは全く背反するものである、と論斷してをる、然るに同じく近世の學者であ

るが英國のベーコン F. Bacon は知識の益を少しばかり口にした者は無神論者になるかも知れぬが、深く學問の奥底に達し眞理の活泉を味ひ盡した者は再び宗教に還るとかういつてをる、して見るとベーコンの説に従へば宗教と學術は互に相容れぬものではなくて、寧ろ終には相一致すべきものである、偶此兩者が背反する様な形跡の見ゆるのは、學問の生嚙なまかきりをした人に多く、深く學問の奥の奥まで叩いた人には決してさう云ふことはない、こゝまで來れば學問と宗教とは衝突するどころか、寧ろ互に融和すべきものであるとかういふ見解になるのである、かやうに同じく近世の學匠でも、コムトの如く學問と宗教は到底兩立しないものであるといふ學者もあれば、ベーコンの様に此兩者の相反矛盾は單に外見皮想に止まり、その内實に立ち至つて見ると寧ろ全く融和すべきものであるとかういふ正反對の見解を有してをる、果してコムトの云ふ如く宗教と學術の兩者は全く相容れぬものであるか、但

しは又ベークンの云つた様に此兩者は融和して相戻らざるものである乎、此問題の解釋は頗る重要な問題であるが、又同時に困難な大問題である、特に現今の日本の様に歐米新來の知識と從來の道德宗教とが、互に相睨離してをつて、人々その何れに適從して、善きやらさつばり分らず、五里霧中に彷徨してをつて、今日一人の學者が出て宗教は哲學と同じだと云へば、さうかと思つてその幽玄を謳歌し、又明日他の學者が出て宗教は神秘的感情だといへば、又之に雷同して、若は有難がり、眞に浮萍の今日は向ふの岸に咲くといふ無定見無節操の時代に當つては、本問題の解決を試みて、その真相に親炙して置くといふことは非常に緊要な事、焦眉の急であると考へられるのである。

私は是れ迄單に漠然と學術(又は學問)と宗教の關係と云ふ言葉を使つて置たが、學術又は學問と云ふ中には科學と哲學の二を含めてを、然し科學と哲學は等しく學術又は學問に相違ないが、又大に趣の違つ

た點があるから、此に極簡單に此兩者の異同と關係を一言して置かう。
科學といへば物理學化學地質學動物學心理學論理學倫理學と云ふ様に各部門々に分れた學問を總稱していふのである、それであるから科學は部分々の學問である、然るに哲學になると是は個々の科學を一括して世界全般に亘る事柄を論究する學問である、則ち哲學は根本原理を研究する學問である、科學はまだ最終の點までその研究が徹底して居ないが、哲學は人力の出来る限りを盡して最終の點迄世界の根本義を推し明らかにする學問である、物理學動物學心理學倫理學の様な各種科學は丁度地方政府の様なものであつて、哲學は一國の根本大元を總べ括つてをる中央政府の様なものである、それであるから此講義は主として學問中の總大將本家本元といふ可き哲學と宗教の關係に就いて主として御話することとする、蓋し學問の本幹である哲學と宗教の關係が明になればその枝葉の科學に就いては之を推して自ら

分つてくる節もあるし、又世に物理學動物學論理學と宗教を混同する人は先づないが哲學となると餘程之と宗教との異同が込み入つて分らなくなる程密接してくるから、かう云ふ回数の短い講演に於ては科學と宗教の關係は直接に之を論ずることを抜きにして、哲學と宗教の關係を御話することは又止むを得ないのである、又その方が極めて適當な事であると私は信ずる。

既に申し述べた通り、哲學は各種科學の總括りをして、最終の問題を解釋するものであるが、その問題は之を大別して宇宙問題と人生問題の二つとすることが出来る、則ち宇宙はどうして出来たものか、宇宙は如何になり行くか、宇宙の根本的本質は何であるか等の問題に對して、最終の斷案を與へ、人間は何の爲めに生れて来たか、人間は死んでどうなるか、人生の意義如何、人は元來かういふ世界人生などの大問題を解釋することが出来るか、人の成立本性如何、人の世に在る目的即ち

哲學の根
本問題と
宗教の根
本問題

人間の目的理想はどこに在る乎等の問題の根本的解釋を與へるものが哲學の本職である、今之と宗教とを比較して見るに、宗教も亦此根本的疑問を解釋する爲めに起つたと云つても、差支ない、成る程哲學と宗教はその名の違ふ如く全く同一ではないから、その問題に對する態度、解釋の工合、研究の難易煩簡等を異にし、且又宇宙問題を主とするか、人生問題に重きを置くかといふ點に於ては、哲學と宗教は相違してをるけれども、哲學と宗教は畢竟斯問題の解釋に外ならんと云つても差支ないのである、中には宗教はこんな問題には關與せぬと論ずる人があられるけれども決してさうではない、その證據には如何なる宗教にも神が天地を造つたとか宇宙は混沌たる鷄子の如きものから出来て来たとか云ふ様な宇宙問題や、人は死んでから地獄へ行くとか天堂へ行くとかいふ様な人生問題が澤山に存在してをるのを見てもすぐ分るので、この問題が全くない宗教は世に一つもないのである、此點に於て哲學

も宗教も等しく宇宙人生に對する同一問題の解釋の爲めに起つたものといつても差支ないのである。唯その問題の解釋法が哲學は他く迄研究的態度で學者風であるし、宗教は主として一般の人々に分る様平易簡單に此問題を解釋し、目に見へる様手に執る様に描出してをるといふ相違があるばかりである。

次に更に進みて哲學は何の爲めにかう云ふ問題を解釋するかといふことを考へて見ると、宇宙人生に對する究竟の眞理を探らうといふ希望から起つたのであるが、然らば又更に一步を進めて、人は何故かう云ふ風に宇宙人生の最終の眞理をつかみたがるかと云ふその原因目的を細かに調べてくると、哲學者の有する哲學も遂に一種の宗教であるといふことになつてしまふのである。則ちそれは外のことでもない哲學者がその哲學に由つて安心立命する爲めにその哲學を作るので、哲學者が經營慘憺して眞理を捉へやうとしてをるのはその眞理を見

開いて宇宙の眞相はかう云ふもの、人生の面目はかう云ふものと合點して之に由りて安心立命しやうといふ爲めにやるのである。哲學研究の最後の目的はつゞまる所此に歸着してしまふのであるから哲學も一種の宗教である。そこでこの眞理を見開いた状態を宗教では佛智見を開くと云ひ、轉迷開悟といひ、本來の面目現前とも説き、此知識を大圓鏡智とも云ふのである。全佛教といふ佛とは何であるか、それは則ち佛陀 Buddha 覺者即ち悟つた者といふ義に外ならないので、つまり宇宙人生の諸有眞理を見開き悟つたものであるといふことに外ならないのである。かやうに考へてくると、哲學も宗教も共に最終の安心立命を得たいといふ共同の要求を有つてをることが分り、この點が哲學と宗教とが全然一致する所である。併し哲學も宗教もかう云ふ風に最終の安心立命といふ所で一致してをるけれども、矢張り哲學は之に達するに學者風で行くし、宗教は通俗平易何人にも解し易い様入り易い様に

やつて行くのである。こゝが此兩者の又非常に違ふ所である。それであるから哲學は實在とか絶對とかいふ抽象的のものを以て對象とするし、宗教はゴッドとか如來とかいふ具體的なものを以て本尊として敬へて行くのである。哲學、宗教の兩者は畢竟

分け上る麓の道はかはれども

同じ高根の月を見る哉

といふ歌の眞意に歸着してしまふのである。

次に又哲學は人間のどういふ精神作用から起るかといふと、矢張心理學的に言へば、智情意三作用から出来るものであるといふより外に仕方がない。詳言すれば我々人間の有してをる如き肉體に伴ふた精神の全體——智情意三者の協動作用——の上に成立するものといふ外はない。勿論此に智情意三者の協動上といふけれども、その中で哲學は元來學者智者の頭の中から湧いてくるのだから、智的要素の餘計活動

した結果であるといふことは、掩ふ可らざる事實である。然るに今翻つて宗教はどうであるかといふと、宗教も亦吾人の様なかう云ふ精神を有つた人間の有してをるものである。少くともかう云ふ身心のある人間の有するものである以上は、又心理學的にいふならば、智情意全體から出来てをるものといはなければならぬ。然し宗教は智情意全體から出来てをるにしても、その中で情意の要素が勝つて居るのである。それは尙哲學が智情意の三者から出来てをるにしても、智の要素に長じてをると克く對應してをるのである。世間で哲學は智であり、宗教は情であるといふ所以のものは、全く此點から哲學と宗教を觀察した結果である。然し哲學は智ばかり、宗教は情計りのものであると解してはならぬ。哲學の長所は智であり、宗教の特色は情であるにしても、その中には哲學、宗教の兩者とも等しく、智情意三者を包含してをるといふことを忘れてはならぬ。こゝが又哲學と宗教の共通點と差異點の存する所

で、此兩者とも、智、情意の三者から成り立つてをるといふ點は同一であるが、その一は智を以て勝さり、他は情を以て特色としてをる所はその異なる點である。

今この立脚地から現今世に行はれてをる信仰論を觀察してみるに、何れも全く否眞理ではないと同時に、何れも完全なものは一もない、則ち現今信仰を論じ信仰を口にする人は、動もすると宗教を感情ばかりのもの、則ち純感情のものと解し、かくして哲學や科學即ち知識からは指一本もさしせない様にしやうと思つてあせつてをるけれども、是は甚しき僻見であつて信仰は決してさういふ性質のものではない、宗教は決してさう科學哲學を毛嫌し知識を敵にする必要はない、既に云つた様に宗教も亦智情意を有つた人心の信仰してをるものである以上は、決して情ばかりから出來やう筈がない、矢張智情意の三者から成立してをるのであるといふこと、又は許さねばならぬ、さうでないといふと宗教

は決して人心の所有にならぬのである、人の精神が信仰を受け取るといふことも出來ぬのである、抑宗教と云ふのは何であるかといへば、第一講で云つた様に神的なるもの即ち神と人との關係である、然らばその神が存在するとか神は人を救ふものだとか我は神から救はれたとか云ふことを知らぬ以上は、宗教といふことは起つてこないのである、有るかないか分らない神に向つて信仰の起る道理がない、人を救つてくれるかくれぬか分らぬ神を頼まうといふ心の起つて來やう筈がないではないか、此點から見るとどうしても宗教は單に情ばかりから成り立つてをるものではなくて、智の分子の道入つてをることが明かである、そこになると元來智的宗教と呼ばれた位で、佛教ではかう云つてをる、佛[○]法[○]之[○]大[○]海[○]、以[○]信[○]爲[○]能[○]入[○]智[○]、爲[○]能[○]度[○]智[○]、度[○]論[○]と、何と味ふ可き言ではないか、智度論の著者龍樹は決して信仰一點張り感情一點張りではなくて、智の分子を十分認容してをるのである、是れ龍樹の龍樹たる所であ

つて、彼が後世八宗の祖師と呼ばれるに至つたのも亦此にある、親鸞聖人も亦、

煩惱具足と信知して本願力に乗ずれば

すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ

と云はれた、此の信知の二字は大に味ふ可きである、又第四福音書の著者もかう云つてをる、

我等信じて知る。汝は活ける神の子キリストなり(約翰傳七)

彼等の曰ひけるは、今汝の言ひし事に因つて信ずるに非ず、我儕自聞いて、こは誠に世の救主と知りたればなり(約翰傳四)

と今この信じて知る。又信ずるに非ず知りたればなりの一言に餘程深く目を付けねばならぬ、基督教の高僧碩徳等も決して信仰一點張り感情一點張を主張したものではない、それであるから宗教は純感情上のもので、知識の分子は少しもないといふやうな議論は、決して穩當なもの

のと云はれないのである。

次に、又信仰は實驗(經驗)である、實感である、宗教は自覚である、などと稱へて、全く哲學科學の知識と關係無い者の様に、取り扱はうといふ向きの人がある、是れ、又、現今大層流行してをる信仰論、宗教論であるが、その所謂宗教は實驗であり實感であり自覚であるといふことも、意味に山つては至極賛成であるが、その所謂實驗といひ實感といひ自覚といふ所のものが、智の作用に少しも關係なく、従つて科學哲學に全く無關係で、忽爾として天から降り、唐突に地から湧いた様に、人の腦裏にヒョット現はれたものと云ふならば、これは事實に相違してをるので、信仰とか宗教とかいふものは、空腹の中へ、パンの片でも投げ込んだ様に、外部から與へらるゝものではない、信仰とか宗教とかいふものは、色々心に煩悶に煩悶を重ね、苦悶に苦悶を積み工夫を凝らして修養以てこれに至るので、チョット空腹中へ外からパンを投げ込む様に宗教なり

信仰なりを實驗し實感し自覺することが出来るものでない、智に少しも關係なく出来るものでない、さういふことは智情意から成り立つてをる人間の精神の本性に背くものであつて、それは獸に向つて空中を飛べと強ひ、鳥に向つて水中に住へと強ゆるものと同一である、到底出來ない相談である、かういふ信仰論は決して正當でない、誤つた信仰論であるといはねばならぬ、既に信仰や宗教にして心理學上には智に大關係があるとする以上は、智の特色を具へてをる哲學や科學即ち學問とは何等の關係もないといはれぬ、否寧ろ大々の關係の有るものであるといはねばなるまい、論より證據佛教と云ふ宗教の中にも聖道門の様な哲學の方面に長じ哲學と密接な關係のある宗教があり、基督教といふ宗教の中にも神學といふ様な哲學と密接な關係のある要素が具つてをるのを見ても分るではないか、若し宗教が哲學と何等の關係もないものならば、事實上からいふ關係を哲學と宗教がもつて居らう筈

がない、此點から考へても論者の説は不完全であるといふことが分る、こゝから見ても哲學宗教は全く無關係のものでなければ互に相仇敵視す可きものでもない、そは寧ろ同一人心の母から誕生した兄弟姉妹の如き密接な關係を有してをるものである、それが偶反目衝突する如き形跡があるのは、此二つが全く一時心安す立てから生ずる兄弟喧嘩の様なものに過ぎぬのである、此兄弟喧嘩のもち上るのを恐れて哲學と宗教の兄弟縁を切らうとする現今の信仰論は、不自然不親切無慈悲といはねばならぬ、人心の母は之を聞いて如何程嘆くであらうか、是の如きは不本意の甚しきものといはねばならぬ、かういふ信仰論者に向つては切に彼等の猛省を促し昨非を後悔してもらはなければならぬ、現今佛教界の一大明星村上文學博士も亦この點を説破せられたること凱切痛快である、則ち博士はその大著佛教統一論第三編の序に於てかう云はれてをる、

人動もすれば謂はんとす、凡そ宗教は信仰に在りて理論にあらざ、
 従ひて宗教に關する研究の如きは益なき徒勞に屬す可きものなり
 と、豈それ然らんや、若し宗教に研究を要せざるものなれば、吾人何に
 依りて宗教を選択すべきや——評——宛然ライプニッツの口吻——
 一又宗教は吾人々類を驅りて迷信の深淵に惑溺せしめ易きものな
 りといはざるべからず、加之論者が宗教は信仰にありて理論に非ず
 といへるも、亦同じく一種の理論にあらざして、そも何ぞや、元來信仰
 なるものは理論と全然背馳して氷炭相容れざるものなるや否やは
 一の問題たるを免れざるなり、乃ち余は謂はんとす、信仰は人々知識
 の程度に順應し、各自理論その極致に到達せる曉に於て方に成立す
 べきものなりと……佛教の如きは本來知的宗教なるが故に、又知的
 研究の必要あり所謂煩惱に就きて見惑思惑を辯ずるが如きは即ち
 知的研究の急務なる所以を證明して餘りあるものなりと謂ふべし、

各論の
 論議
 は何んとして
 なるものなりと

是故に研究的態度を以て佛教に趣向せんと欲する有道の士を徒ら
 に排斥して顧みざる者は、まだ深く佛教を學ばざる途上人士の言な
 るのみ、苟も少しく知識を有する者誰かその言に従はんや……此の
 如く研究的態度を以て佛教を論究するは、即ち印度以來一絲連綿と
 して絶へざる先賢の遺風を願學する所なり、余豈敢て贅論を好む者
 ならんや。

ライプニッツ Leibniz といふ哲學者も亦、

若し宗教に全く智力が働かないものならば、若し此に謬つた信仰
 を抱いてをる者があつた時に、どうしてその人の謬を指示して真正
 なる信仰に導くことが出来るだらうか、他人の信仰の謬を訂して真
 正の宗教に導くと云ふことは、則ち智力の働ではないか、

とかう云つてをる、一派信仰論者の宜く猛省を促す可き頂門の一針で
 あらうと思ふ、尙詳くは附録二、三を参照して貰ひ度い。

以上段々哲學と宗教の同一の點と異なる點とに就いて申し述べて來て、哲學も宗教も心理學的にいへば、共に智情意全體から成つてゐるものであるが、その中哲學の特長は智に富んでゐるといふ所にあるし、宗教の特色は情に秀でてゐるといふ所に存してゐるといふことを明にしてゐいたが、この心理學的基礎の相違は哲學と宗教の諸有發表に於て見ることが出来るのである、今その相違の中特に著しいものを擧げれば、哲學の根本義としてゐる所の對象と宗教の根本義としてゐる所の本尊との間に表はれてゐるもの、則ち是である、則ち哲學は宇宙人生を智の眼鏡で觀察し、智七情意三の割合で見てくるから、その根本義を最も抽象的に把持して實在とか絕對とか一如とか活動とか意志とか無意識體とか大我とか不可知體とか見るし、甚しきに至つては唯物論の様に死んだ物質と考へ、如何にも乾燥無味吾人をして恰も蠟を咬むの感あらしむるに至るのである、然るに哲學と同じ根本義でも、宗教

の様に情の眼で觀察し、哲學と反對で情意七智三で見てくると云ふと、神は愛なりと見え、佛心者大慈態是なりと映じ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、無量壽無量光の阿彌陀と見え、相好光明と觀じ、盡十方無碍光如來と現はれ、大日如來と表はれ、全知全能の主天に在す我等の父として仰き見る様になるのである、換言すれば、哲學が無人格的に見てをつたその根本義を、宗教は人格的に見生ける神として之を寫象するに至つたのである、かく抽象的な哲學上の根本原理である實在とか絕對とかいふものを、宗教が光明無量とか壽命無量とかいふ様に、色や形に事寄せて把持したものは、即ち宗教の本尊たる如來ゴッドであつて、學者之を象形表出即ちシムボル Symbol と稱するのである、世間でシムボルを譯して記號とか符徴とか云つてゐるが、成る程宗教に云ふ本尊は哲學にいふ絕對や實在の記號であり符徴であるに相違ないけれども、記號といひ符徴といふも、まるで形のない任意の符號ではない、人

心に根底あり、人性に根據を有つた符徴であり、符號である。哲學が宇宙の根本義を實在とか、絶對とか名づけると同一價値を有ち對等の權利資格を有した符號である。智の上より實在とか、絶對とかいふものを知ることが出来ると同じ様に、情の上からゴットとか、如來とかいふものゝ存在を信ぜられるのである。それであるから、法然上人は極樂不遠而構十萬億刹之西阿彌在已心而現一座華台之形不思議智不可稱智等者指此善巧方便也(大原談議)といはれた。流石は法然上人丈あつてよくシムホルの意義を明にせられて又遺憾なく、哲學的意識と宗教的意識とは一方のみ輕ず可きものでない、共に信すべき同等の資格あるものであるといふ真相を巧みに喝破せられたと云はねばならぬ。哲學風に抽象に抽象を重ねていへば、本體實在は百非洞遺四句皆亡言語道斷心行所滅摩阿止觀のものであつて、上天載無聲無臭至矣中庶といふの外はない。畢竟維摩の一默の様にウンと云つて黙してしまふより外に仕方

がない、

如何向上求眞覺悟到眞時一字無于默齋

の情態である。然るにそれでは致し方がないから少しく之をシムホルに寫し象形に表出して自然虛無之身無極之體大無量壽經とても云つておくのである。是れ哲學上の實在を宗教上の本尊に翻譯する所以の道である。哲學上の實在、宗教上の本尊、この兩者は與に共に眞實である。前者獨り眞實であつて後者は虚妄といふ譯では毛頭ない。こゝを見過つてはならぬ。若しさうすると學問獨り眞理で宗教は虚妄といふことになる。併しさういふものではない。今この虚無之身無極之體を尙一層具體的にしたものは西方十萬億土の廣大無邊なる阿彌陀如來である。如何なる無明の暗をも照破し盡す所の盡十方無碍光佛である。大日如來である。それであるから親鸞聖人は、

虚無之身無極體平等力を歸命せよ、

と云はれたかと思へば、すぐその口で、精微妙、非人天と云ひ、顔容端政、たぐひなしと説かれ、更に象形に表出して、

一々の花の中なかよりは三十六百千億の

光明てらしてほがらかにいたらぬ所はさらになし

一々のはなのなかよりは三十六百千億の

佛身も光もひとしくて相好金山の如くなり

相好ことに百千の光も十方にはなちてぞ

つねに妙法ときひろめ衆生を佛道にいたらしむ

と述べられたのである、有名なる聖アウグスチヌス Augustinus が哲學者として、神は無量の大無性の善 God is great without being a quantity; God is good and yet without a quality とかう云つてをるが、然しこの神の廣大無邊なることを形容して又かうも云へるのである、則ち神の廣大無邊なる、

富士山をその手枕と見るときは

太平洋は褥なりけり

神の廣大無邊なる芙蓉千秋の雪峯を以て枕とし、一碧大瀧の水を以て褥としてをるとかう云つてもよい、然し尙一步進んで、

ヒマラヤに腰打ちかけて大空を

笠に被れど耳は隠れず

とかうも云へる、香神の廣大無邊なる又左の如くいつてもよい、

須彌山に腰打ちかけしその者を

まつげの先でつきとばしけり

否更に進んで、

天と地を團子に丸めて手に載せて

ぐつと呑めども喉に障はらず

と云つて、神の廣大無邊なることをたゞへるとが出来る、先づ斯く廣大

なものが神である、神は先づかう想像すればよいといつても差支ない、それであるから印度の外道はその神摩醯首羅 Mahesvara をかう云つてをる、則ち虚空是頭、地是身、水是尿、山是糞、一切衆生是腹中虫、風是命、火是煖、福是業、是八種是摩醯首羅身(外道小乘涅槃論)と、今之を前と同じ様に歌にして云つてみればかうなる

山根つけ海巾着に川は紐

(つゝ内々(わ))

緒メは三五十五夜の月

とかうもいへるのである、その云ひ方こそ卑近であるけれども是等の歌はアウグスチヌスが云つた様に神は無量の大無性の善といふのとその精神に至つては少しも違はぬのである、何れも神の廣大無邊なることを申し述べてをるのである、唯この歌の方は通俗卑近何人にも分る様具體的に云ひ表はしてをるといふ丈である、どちらも同一眞理を云ひ現はしてをるのである、又一つ別の例を以ていへば、人道の重ずべ

きことを教へる爲めに、道學先生の様に六ヶ敷倫理學書を講じても善いのであるが、又赤十字旗一本見せてもよいのである、六ヶ敷倫理學書を滔々數萬言講釋して聞かすのも、人道の眞實義を人に傳へるのであるし、赤十字旗一本を見せても亦人道の光明の尊ぶ可きことを人に教へることになるのである、その外形の上から云へば此の兩者は非常に違つてをるが、その内容精神をみてくれば兩者全く同一で、同一の事實を違つた形で教へてをるのである、此兩者は何れを上とし何れを下とし何れが尊く何れが卑いと云ふ譯には行かない、此兩者は眞に、互角の勢對等の價值を有つてをるものである、今哲學と宗教の關係も亦さうである、一は抽象的理論に由り他は具體的シムボルを以てするのであるから、その現れ方外形丈は大層違ふけれども、その内容精神は全然同一である、抽象的の理論に由る哲學が尊く具體的シムボルを用ふる宗教が卑いといふ譯はない、どちらも對等の價值同士の資格を有して互

に相下る可きものでないと同時に、又その一が他を凌ぐ可きものでもない、その権利は各々五分五分である、人は哲學の眞理を研究すると同時に、宗教を信仰することが出来るのである、否寧ろ哲學又は廣く云つて學問と宗教は鳥の双翼車の兩輪の如く、互に相待ち相依つて世界の文明に貢獻す可きものである、徒に信仰は知識を忌み哲學は宗教を嘲り、互に感情を害して兄弟牆に闘ぎ、その結果兩者中その一が倒れて、唇亡びて齒寒しの痴態を演ずべきものでない、宗教は決して學問(科學哲學)の進歩を恐れるに及ばない、學術を敵とするには當らない、寧ろ日新の學術をその良友となし、忠告者と看做して互に相提携して行くべきである、コムトの様に學問が進歩すれば、宗教は全滅すると思ふのは、此兩者の性質關係を能く知らないから、科學に心酔した結果である、これは科學萬能主義といふ一種の迷信病に罹つた結果である、私は寧ろベークンと同じ様に、學術の研究が進めば進む程、宗教の信仰が一層深

くなるといふことを、宗教學研究の結果として眞理と認めるのである、但し科學哲學の進歩に連れて愈々その信仰を失つてしまふのは、神話即ち *Mystic* である、例之七日で神が世界を造つたとか太陽が動いて地球が静止してをるのであるとかいふバイブルの中に在る神話や印度の宗教でいへば彼の有名な須彌山説の如き神話的天文説や、又印度の四姓の種族は夫々その階級に應じて梵天の頭や足から生れ出たといふ様な神話、又人間の肉躰はエホバが土塊から造つたのであり、その靈魂は神が吹き込んだ神の息氣であるといふ様な神話は、日進の學術と相容れないものであつて、是等の神話は一たび科學の光明に照された結果、人心を支配する所の信仰たる價值を失つてしまひ、科學の爲めその位置を奪はれてしまふのである、斯く神話は學術の進歩に由つてその根據を失ひ、科學の爲めにその位置を奪はれるものとなるのであるが、眞正の宗教そのものに至つては、科學や哲學の爲めに打ち

亡ぼされ、ないのみならず、益々學術の研究が進むに従つてその眞理を發揮し従前より一層深い意味のあることが明になつてくるのである。それであるから科學哲學と宗教は至つて密接な關係あるものであつて互に相待ち相依つて行く可きものであると云はんければならない。併し又之と同時に宗教は彼の抽象的な理論を主として居る哲學に見る事の出來ぬ象形表出即ちシムボルといふ者に由つて宗教的對象即ち宗教の本尊を寫象してくる、こゝが宗教が具體的であつて抽象的な哲學と違ふ所、抽象的な哲學が二三學者の精神に満足を與ふるに過ぎないのに、宗教が人民億兆の慰安に役立つ所以である。斯くして哲學と宗教とは各自その受持々々の方面を分擔し、同一眞理を夫れ／＼得意の方面に向つて宣布し、さうして各自の天職を全うして獨立自存の體面を保つて行く所以である。このシムボルが宗教に行はれる所は、實に宗教が哲學と同じく、同一世界の問題を解釋しながら、哲學と異つ

て美術の方に密接して來る點であるが、その詳細は此に申し述べて居る暇がないから先づこれ略して置いて、今は唯學術と宗教の關係を明にしたのに止めて置く。

尙終に一言す可きことは、近頃亞米利加の心理學者スターバック Starbuck といふ人が、宗教的信仰の變化して行く統計を取つたが、その統計の結果に由ると、小學教育を終る頃即ち十二歳頃からして、二十五歳頃迄、即ち中學大學の教育の終る頃迄の間は、人間の信仰の危期であつて、十二歳頃迄家庭で盲目的に注入されてをつた宗教は、學術の光明に照されて、一時信仰の立脚地を失つてしまつて、懷疑に陥り、多く無信仰になる。人に由つては二十歳頃即ち大學に這入る頃から大學を十分卒業してしまつた頃即ち三十歳頃迄に於てもう一度宗教的信仰が確立してくるといふことを統計的に研究した。此の研究結果は丁度ベークソンの云つた、少しばかり知識の盃を口にしたものは無神論即ち無宗教

になるが、深く知識の泉を味つたものは再び宗教に還へるとの言葉と、古今符節を合はすが如き結果になつてをる、此點から見ても學術は決して宗教の敵でないので、宗教は寧ろ學術を待つて益その光を發揮するに至るものである、廿世紀の様に學術はいくら進んだからといつても、之れが爲めに宗教は信ぜられなくなり、宗教は唯愚夫愚婦の玩弄物に過ぎないといふことになるものではない、成る程世の進歩に伴はず文明の世界に當て籍らない神話的宗教の如きは、日新月歩の學術と共に衰頹に歸して、迷信の劣伍に下つてしまふけれども、眞正の宗教そのものに至つては決してさう云ふことはない、却て日新月歩の學術と與に伴つてその光輝を八紘に發揮しその眞價を六合に發揚するに至るものである。

第四講 宗教と徳道の調和

宗教及び道德の起源——宗教と道德の分離——世俗的道德の獨立——世俗的道德の批評——宗教的道德の本義——宗教の反倫理と超倫理——他律道德と自律道德——宗教的道德の極致

前講に於て宗教と學術の關係を論定して、科學哲學と宗教とは決して矛盾するものでなく、一致調和して行はるべきものである、否宗教と學術とは互に相補ひ相輔けて益その眞價を發揮することが出来るものであるといふことを述べたが、今又更に宗教と道德とは如何なる關係のあるものかといふ實際上頗る重大なる道德と宗教の關係問題を論明しやうと思ふ、即ち宗教と道德とは全く無關係なものであるか、將又此兩者は非常に親密の關係を有つてをること、恰も學術と宗教の場合に於て見た様なものであるか、但しは又此兩者は全然反對の位置に立つ可きものであるかといふことを論究し、次に教育と宗教の關係に

及んでその調和點を發見しやうと思ふのである。

先づ宗教の起源に遡つて之を考へて見るに、宗教は實に人類あつて以來の現象であつて、如何なる太古蠻人の間と雖も、何等かの形式に依つた宗教の無いものは一も無いのである。彼の石器時代の蠻民と雖も、宗教を有してをつた證據は歴々として存して居るので、石器時代中最も古い舊石器時代の宗教と雖も、恐くは物活教よりは幾分か進歩した宗教だつたらしいのである。爾來宗教と云ふものは劣等から高等に進んで連綿として發達進化して來たのである。然るに道德又は倫理とは何てあるかといふに、それは拉丁語のモレス *Mores* 希臘語のエトス *Ethos* から來たもので共に元と風俗習慣を義としてをつたのだから、道德即ち風俗習慣なるものは又石器時代の太古から苟も人類の在つた所には存してをつたに違ないので従つて又道德は石器時代の宗教と相並んで存してをつたと考へて差し支へない。否その時代の宗教も一

種の習慣風俗に外ならないのであるから、道德と宗教は又太古遼遠の昔から一所に存在してをつたに相違ない。既に此兩者が一所に存在してをつた以上は、又互に何等かの關係がなかつた等はないから此點からいへば道德宗教の兩者は、既にその極の極の發端から、或一定の關係に於て存在し、互に影響し合つてをつたといふことは争ふ可らざる事實である。謂はなければならぬ、否寧ろ太古に在りては何事も分業か行はれて居らないので、道德も宗教も學問も皆一になつて混在してをつたと謂ふ可きである。それであるから道德は宗教に影響し宗教は道德に反照し、學問から政治に至るまで、宗教の感化を蒙り、又學問政治は宗教に關係して是等は混然たる一體の状態て存在してをつたのである。我國古代の祭政一致の制度や、古代猶太人の神政々府の如きは、皆この適證である。猶太に在つてはモーゼといふ家長の命に従ふのが則ち取りも直さずエホバ神の命令に服従するのであつて、政治も道德も

宗教も皆一つであつたのである、戦争をするのも、亦猶太人守護の神エホバが命じ給ふ戦争である、宣戰媾和の布告は即ち神が之を執行さるのであると考へられてをたつたのである、それであるから此時代に於ては道徳宗教は殆同一物であつて、此兩者は二にして一々にして二といふ有様であつたのである。

然るに人知の進歩と共に社會も複雑となり、従つて世の中の事は皆分業的となつてくるのである、そこで學問は宗教と分離し、政治は神の配下を脱し、道徳も亦宗教を離れて漸く一個獨立の單獨なる方向を取りて進歩發達してくるのである、して學問が宗教と分れ道徳が宗教と手を分つに至る原因は、主として人知の進歩に連れて、人々從來の宗教が教へて居つた事で満足が出来ず、學術なり、道徳なり、一つ獨力で宗教に依らず宗教の束縛を受けずしてやつてみやうといふ獨立心が起つて來て、そこから學術も道徳も宗教と分かれて、獨立獨歩の行路を取つ

て進んで來るやうになるのである、例之道徳の方で云ふならば、從來神話的宗教で教へてをたつた神々には、どうも神々として、則ち人間以上の位置に在るものの行爲として受け取りにくい行がある、神にして詐偽をやつたり婦女を姦したり陰謀を企てたりして、人間にも恥つべき行狀が澤山ある、かう云ふ神を本尊としてをる宗教の教ふる道徳には吾人は従へぬのである、かく不道徳を教ふる時代後れの宗教に道徳はいつ迄も平身低頭してその附屬物となつてをる譯にも行かぬ、こゝは宜しく一本立に獨立してやつて行くが善いと、かう云ふ見識から道徳は遂に宗教の配下を脱して單獨の方向に進んでくる様になるのである、こゝからして從來の宗教的道徳は一時跡を收めて世間的道徳世俗的倫理は之に代はつて現はれてくるのである、則ち

心だに誠の道に叶ひなば

祈らずとも神や守らん

て、己れ自ら道徳さへ完うすることが出来たならば、神などは有つても無くてもよい。若し神が有つたならば、さういふ善人には必ず幸福を下し賜はるに相違ない。萬が一神がないにした所で、賊の道さへふみ行つて行けば、それで善いので、敢て神や佛などに祈願するに當らぬ。道徳には神佛を藉りて來る必要は少しもない。泰西の諺にも云ふ通り、天は自ら助くるものを助くるので、自ら道徳さへチャンと守つて行きさへすれば、それで善い、強ひて神を拈出して道徳を説くに當らないと、かう云ふ見識からして、道徳は遂に宗教の支配を脱してしまつたのである。こゝが宗教の力を藉りない世俗的道徳の起り初めてである。

かやうにして世俗的道徳は起つて來た。然し宗教的道徳に於ては、その凡ての根本義は皆神にもつて行くので、人はなぜさういふ事をせねばならぬかといふと、それは神が命ずるからであるといふ一言で済んでしまふ。神は唯一の教權オリーソリチーである。善惡の標準もこゝから

起れば、人生の目的もこゝから説明される。倫理道徳の理想もこゝに基いて立てられるのである。然るに世俗的道徳ではこの便利な都合の好い神といふ最上原理を全く捨て、取らないのだから、倫理道徳の説明には頗る窮窮して、そこで何等か他の根本原理に訴へて倫理道徳を説明しやうとする。此に於て快樂を得るのが人生の目的であると論ずる快樂主義や、最大多數の最大幸福を計るのが道徳の究意理想であるといふ功利主義や、近世進化論を根據としてをる進化論的利己主義や、或は又カントの様に徳は徳なるが故に之を爲せ敢てその結果如何を顧みてやる可きものでないといふ嚴肅主義等、種々様々の世俗的道徳が現はれてくるのである。

さてこゝで一々世俗的道徳の種類を列挙して辯明する譯には行かないから、世俗的道徳中二三の實例を舉げて之を批評し、さうしてそれと最も進歩せる宗教を根本義としてをる宗教的道徳との優劣高下を

對照比較して見やうと思ふ、例之快樂主義は畢竟利己主義であつて、人は自己の快樂を目的として道徳を實行し、してこの自利の目的の爲めに時には利他をも行ふのである、然し都合さへ善ければ利他などは成るべくやらない様にして、自利をうまくやつて行くのが快樂主義即ち利己主義の取る所である、道徳を實行するのも畢竟不道徳なる自利が目的である、とかういふのだから、到底崇高な道徳はかういふ智略主義からは出來ないのである、卑近な例で云へば快樂主義の道徳は人生の目的は盜賊に在るが、人目を忍ぶ限り猫をかぶつて良民を装へと、かういふのである、かういふ主義からどうして眞面目に道徳の實行が出來やう、道徳は一種の偽善と化し去つてしまふのである、之をもつと明らかに赤裸々の有様でいへば、ニーチエ Nietzsche の所謂不道徳主義印度の順世外道一派の私慾満足主義又は本能主義に陥らなくつてはならないのである、則ち順世外道一派の人はかういつてゐる。

利己主義の取る所である、道徳を實行するのも畢竟不道徳なる自利が目的である、とかういふのだから、到底崇高な道徳はかういふ智略主義からは出來ないのである、卑近な例で云へば快樂主義の道徳は人生の目的は盜賊に在るが、人目を忍ぶ限り猫をかぶつて良民を装へと、かういふのである、かういふ主義からどうして眞面目に道徳の實行が出來やう、道徳は一種の偽善と化し去つてしまふのである、之をもつと明らかに赤裸々の有様でいへば、ニーチエ Nietzsche の所謂不道徳主義印度の順世外道一派の私慾満足主義又は本能主義に陥らなくつてはならないのである、則ち順世外道一派の人はかういつてゐる。

天あるなし解脱あるなし精神あるなし他界あるなし行爲の應報あるなし。
 諸の儀式は知方度量なき人が生活の方便のみ。
 若し犠牲を供して其供物天上に昇るならば何故に人はその父を犠牲に供せざるか。
 若し供物が死し逝きし祖先の腹を充すならば何故に旅人は糧食を齎すか。
 若し地上の供物天上に達するならば何故に屋下の食は屋上の人を養はざるか。
 生命のあらん限り快樂を盡せ汝の友より財を借り來りて美食に飽け。
 どうです、快樂主義を明々白々地少しも包み藏す所なく打ち明けていつてしまへば實にかうである、然しこれは人に不道徳を教ふるもので

あつて道徳を教ふるものでない、快樂主義は不道徳から道徳を割り出さうとするのであるから、禽に鷹を、生ませやうとする計畫である、竹から木をはやさうと云ふ目論見であつて、到底出來得ることでない、快樂主義が倫理道徳の主義として不完全なのは以て知るべきである、然らば功利主義は如何といふには、是は一個人の利益が目的ではなくて、社會多數の利益を目的とするといふ所は一見して快樂主義と異り、利己主義と違ふやうであるけれども、その實さうでない、もう一步進んでなぜ社會多數の利益を計ることを努めねばならぬかと推して尋ねれば、それは畢竟自己の利益になるからとかういふことに歸着するのである、それであるから功利主義は單に快樂主義又は利己主義の極端なるものを、一時塗糊したものに過ぎない、假面をかぶつたものに過ぎない、その根底に至つては快樂主義に歸着するのである、それだから快樂主義が不完全なると同時に功利主義の取るに足らぬことは明かである、次

に私がこゝで進化的利己主義と名づけたのは左の如き倫理上の主義を云ふので、則ち十九世紀に於てダーウィン C. Darwin が出て生物學を研究した結果、生存競争自然淘汰適者生存優勝劣敗といふ如き原理を設けて、生物進化の事實を説明した、今この原理の眞理なることを認めて、それを人類社會に迄推し及ぼし、等しく生物中の一である人間といふものも、慈悲とか、博愛とか、他愛とか、何とか、蚊とか、高尚めきたことを云つてをるけれども、その實自ら優者になつて劣者にならぬ様に努め、上へは如何にも親しさうに交際してをる親戚朋友、臣父子の間にも、能くその真相を探つてみると、生存の競争が激烈に行はれてをる、身を殺して仁をなすなどと云ふと、如何にも高尚に聞えるけれども、それもその實己を利用する爲め、自己の利益を完ふする爲めの行動云爲に外ならないのである、斯く生存競争と云ひ優勝劣敗といひ、つゞまる所利己の二字に歸してしまふのである、而も之がダーウィンに由つて確實に

證明された科學上の眞理である、して見れば進化論といふ科學上の眞理から見ても、利己といふことが人生の眞理眞相であるに相違ないと、かういふのが進化論的利己主義と私が名づけた所の道德上の見解である、しかし此學説は證する所前云つた個人の快樂を重んずる快樂主義利己主義に歸着してしまふのである、唯それを進化論といふ近世科學の應援を得て一層眞理らしく説明した丈に過ぎぬのである、かやうに快樂主義といひ功利主義といひ進化論的利己主義といひその現はれた外貌は違ふけれども、その終極する所は畢竟利己といふ一點に歸着してしまふ、利己といつても遂にはその精神でなく特に自己の肉體の満足といふことに歸着してしまふのである、人生の目的は詮じつめれば一に肉體の快樂に在るといふことになつてしまふ、身を殺して仁をなすとか他人の爲めに博愛を行ひ慈善をやるとか云ふことも、畢竟この自己特に自己肉體の快樂を満足させる方便手段に過ぎぬといふこ

とになつてしまふのである、則ち道德方便説である、して又是等の快樂主義功利主義進化論的利己主義等の等しく依りて立つ所の根底基礎は結局唯物論といふことになるのである、既に肉體の快樂がとゞの詰りの目的であつて道德といふことはそれに達する方便手段に過ぎぬといふことになるから、若し他人を愛すると云ふ様な回はり遠い方法に由らないで、自己の利益を完うすることの出来る様な道德があるならば、それをやつた方が尙便利である、そこで人前で如何にも高潔らしい顔付をしてを つても、人の見ぬ間は どうでも構はぬといふことになつて来る、してみるとかういふ風な道德主義を抱いて居る以上は、彼の不愧于屋漏(中庸)とか又は君子必慎其獨(大學)とかいふ様な、高尚な道德は實行されなくなつてしまつて、畢竟大學に所謂小人閑居して不善を爲すに至らざる所なし、君子を見て後ちに厭然其不善を拵ふて其善を著はす、といふ様に人前ばかり飾ることを獎勵するに外ならないのであ

る、こゝがその理論上の根底を唯物論に置きその實踐上の主義を快樂とか功利とか進化論的利己主義とか云ふものに取つてをる倫理説の不完全なる所以である、此に於てこの缺陷を補はうとしてカントの様な人は、理論上には唯物論を採らず、實踐上には嚴肅主義を稱へて、己の利益になるからそれとて道徳を行へとか、自己の快樂を増進するからマ、嫌でも他愛を勤めよとかいふのではなくて、徳は徳なるが故に之を行へ(カントの所謂無上命法)と教へ、人間の良心は吾人にそれを嚴命するではないか、それは内にさゝやく良心の聲、大我の聲ではないか、と説いた又之をストア哲學者や儒教風にいへば、それが道である、武士道風にいへばそれが武士の本分である、身を殺して仁を爲すは志士仁人の勤であつて、君王に靖献するのが是れ眞個に臣子の本分である、刀の手前に取つても不義は行へないとかう云ふのが、實にカントを初めストア哲學者儒教武士道等で主張する道徳である、之が古今の徳教が吾人

に要請する道徳主義である、この主義からいへば獨を慎む所の君子、屋漏に慚ぢざる聖賢も出來てくるのである、なぜならば道徳を實行した結果快樂が得られるとか、自己を利するとかいふことが、最終の目的ではなくて、徳そのもの、勤が最終の目的であり理想であつて、人の見てをる見てをらぬに關はず道徳を實行するのが人の人たる本分を盡すことであるからである、道徳主義は實に世俗的道德と宗教的道德との中間に立ち、快樂主義の様な世俗的道德から宗教的道德に推移する過渡の橋梁を爲してをるものといつてもよい、否儒教の如き武士道の如き、そは道徳であると同時に一種の宗教である、ゴッドや阿彌陀の如き人格的一神を對象に立てる基督教や佛教中の淨土教などは餘程趣が違つてをるにしろ、之に由りて最終の安心立命をやつてをるといふ儒者や武士に取つては、それも矢張一種の宗教である、カントの如きは、宗教といつても畢竟それが道徳と違つてをる所は、唯宗教で

はさういふ道德を神命として奉ぜしむる丈けのこととて、こゝだけが道德と宗教の相違であるとかういつてをる、カントの道德主義の如き宗教的道德と相距る眞に一步と云はなければならぬ、かやうにカントの道德主義や儒教や武士道の如く、その道德主義が宗教詳言すれば發達した宗教に近づけば近づく程眞の宗教の門戸に一步を履み込めば履み込む程道德としての効果が著しくなつてくることを思へば、發達せる宗教と眞の道德との密接せる有様を知るに足る可きであつて、否一步進みて宗教に根底を据へた道德が如何に有力なるかを知るべきである、實に道德は進んで宗教に入り、道德と宗教の根本義が合して一となつた所で、初めて道德が實際有力なる効果を現はしてくるのである、また外へしてカントより一步を進めて哲學風に此點に迄達してをると思ふのは、ロツツェ Loize グリーン Greenなどの倫理哲學である、扱又カントの所謂道德上の無上命法とは今日の言葉でいへば良心の聲である大

我の聲である斯く良心の聲大我の聲として、人が心の中に聞く所のものを大我の色として見るに至れば、此にカントの道德上の根本主義が宗教的道德主義と變じたのである、則ち大我の色とは何であるかと云ふに、それは則ち神そのものに外ならないのである、相好光明である、盡十方無碍光如來である、阿彌陀であり大日如來である、天に在ます父なる神である、人一たび其倫理道德上の根本義を、この如來ゴッドとして認むるに至れば、こゝに世俗的道德は一變し宗教的道德に轉じたものである、單に善を勤め惡を避けしむる自己良心の聲とのみ聞いて居つた所の道德法も、若し少しく之を擴大して自己即ち小我の中に響く大我の聲と聞くに至り、尙更に一轉して父なる神より來るものと感じ、盡十方無碍光如來の喚聲と聽くに至れば、こゝに宗教的道德の基礎は成立するのである、儒教が人の道だといひ武士道が武士の本分だと稱して甘んじて居つた所のものを以つて、それは人の履む可き道であると同時

に、宇宙に遍満し人生を攝理せる全知全能の神の道であると観じて來れば、こゝに徳教は一變して純乎たる宗教となつたのである。祭神如神在（論語）と云つた儒教的道德半宗教的道德は一轉して、單に神在すが如くするのてなく、眞に神在まし、神の中に生活し、佛の光明中に栖息してをる我は、せめて斯く々々の善事を實行せねばならぬと、かう思つて道德を實踐躬行するに至るのである。是が眞の宗教的道德である。嚮者の半宗教的道德より一步を進めて純宗教的道德となつたのである。武士の本分とは單に人の勝手にさめた約束でなくて、神の人間に下し給へる教である。神の掟であるとかう考てくれば、神があつてもなくても善かつた武士道は一變して純然たる宗教となつてしまつたのである。カントは道德法を神命と見て實行するに至れば直に宗教になると云つたが、道德法を神命と見てゐない吾人の行住坐臥常に嚴守すべき道德は眞に神命である神の中に行はれてをる天則である。いやとも實行

せねばならぬ天理天則であるとかう見て來て、道德を實行し來つたならば、此に徳教は純乎たる宗教になつたのである。道德法即ち Moral law は神法即ち Divine law になつてしまつたので、この兩者は全然一致してしまつたのである。これが宗教的道德の深意の存する所で、保羅の所謂我は神の中に動き生きさうして在るものなりとの信仰もこゝから生じ常に攝取の心光中に生活して大悲の願船に乗じて正定聚不退の位に入つた我等は神の愛子佛の御子として妙好人として稀有最勝人として、その日その日の日送を分相應に勵み勤めねばならぬのである。なぜならば神の榮光中に生活し、如來の光明中に栖息してをる程のものは、己の一言一行が皆佛行である。入つては父母に事へ出でては君に仕へ、夫婦相和し朋友相信じ、一旦緩急ある時義勇公に奉ずる行迄、一に神の掟に従つてやつて行くのである。宇宙の大法則天理に隨順して行く所の行爲であると考へてゐる。こゝからして如何なる微細な事でも

決して輕んずる譯には行かなくなる。それは皆榮ある神の仕事をやつて行くのである。佛の尊い御仕事をさしてもらうのである。無限の歡喜に包まれて、寸善もあらずをかにせぬ様になるのである。是れ實際世の中に幾多の慈善事業が此心得ある宗教家に由りて經營され、人のいやがる癩病患者の避病院などの事業が主として宗教信者に由つて經營されて行く所以である。實に神は愛なり。佛心者大慈悲是なり。此宗教的道德が心に受取られたならば、孤兒を憐み、寡婦を恤み、病者をいたはり、行旅を慰め、所有博愛慈悲の行爲をせずには居られないのである。なげならば神は愛であるから、天に在す汝の父の全きが如く、汝等も亦完くすべし。とは宗教信者の唯一最終の理想であるからである。斯く觀じてくれば、他人からいくら迫害に逢はうが、他人は己の意志を知つてくれない。徒に椽の下の方持の様になる時でも、少しも不足を感じない。我は唯我が神から命ぜられた所の本分を守つてやつて行く。丈であ

る人の知ると知らざるとは、我に於て何かあらん祈り求めざるに我等の求むる所を知り給ふて、天に在す父なる神は能く我等の微意を知り給ふのである。我は如何なる艱難に逢はうが、何かあらん見よ神の一子たる耶穌基督は十字架の上にその生命を捨て給ひしに、非ずやとかう考へてくる。眞に保羅が言つた様に、信仰に由つて神の榮を望んで心に歡喜を生じ、如何なる患難に逢つても歡喜を生じ、患難は忍耐を生じ、忍耐から自然練達が生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來さざるを知る。羅馬書五といふ大確信に安住して、胸中自ら光風霽月の如く、餘裕充ち満ちて、ルートルの所謂良心の命ずる所に従ふのは、智者のこと、正士の行である。ウルムスに在る敵敵の數屋上の瓦甍の如きも、我行かんと、の、大自信力を得其結果倫理道德上の大活動として發現するに至るのである。此の境界に立ち至つた人にして初めて名教中自有樂地の趣を味ふことが出來。素當貴行乎富貴素貧賤行乎貧賤素夷狄行乎夷狄素患

難○行○乎○患○難○君○子○無○入○而○不○自○得○焉○中○庸○の○至○境○を○一○身○に○實○現○す○る○こ○と○が
出○來○る○の○で○あ○る○、自○己○の○快○樂○と○か○肉○軀○の○快○樂○と○か○そ○ん○な○世○俗○的○道○徳○の
い○ふ○こ○と○な○ど○は○テ○ン○デ○齒○牙○に○懸○ら○ぬ○こ○と○に○な○る○の○で○あ○る○の○で○あ○る○、釋○尊○は○こ○の
精○神○上○の○至○境○を○形○容○し○て○左○の○如○く○い○は○れ○た○。

三○毒○五○慾○境○ 永○斷○無○餘○習○ 如○蓮○葉○在○水○ 不○染○濁○水○泥○

自○悟○入○正○道○ 無○師○無○等○侶○ 今○得○成○正○覺○ 堪○爲○天○人○師○

身○口○意○滿○足○ 故○号○爲○牟○尼○ 諸○天○及○世○人○ 所○歡○於○五○慾○

比○我○禪○定○樂○ 不○可○爲○比○喻○(因○果○經○)

車○馬○生○死○乘○ 危○險○安○可○久○ 參○駕○五○通○馳○ 所○至○無○限○礙○

本○着○七○寶○衣○ 珍○妙○甚○雅○好○ 剃○髮○被○袈○服○ 如○何○不○羞○恥○

慚○愧○爲○衣○服○ 世○衣○增○塵○垢○ 法○衣○真○人○服○ 息○心○爲○如○來○

本○田○金○銀○品○ 衆○味○甚○香○美○ 今○者○行○乞○食○ 麤○惡○安○可○咽○

法○味○爲○道○食○ 飢○餒○今○已○除○ 衰○世○故○行○乞○ 持○鉢○福○衆○生○

本○處○別○宮○中○ 衆○宮○妓○侍○術○ 獨○在○山○樹○間○ 如○何○不○恐○懼○
生○死○恐○畏○除○ 今○已○入○本○無○ 無○憂○無○喜○想○ 所○止○爲○道○場○
本○在○我○家○時○ 浴○澡○名○香○汁○ 處○於○山○樹○間○ 何○物○洗○身○垢○
道○藏○爲○浴○池○ 正○水○滿○其○淵○ 浴○已○三○毒○盡○ 三○達○快○無○双○

(中本起經)

こ○の○境○界○に○出○入○し○得○て○初○め○て○眞○の○宗○教○的○道○徳○の○眞○實○義○に○躰○達○し○た○も
の○と○い○ふ○べ○き○で○あ○る○、實○に○崇○高○な○る○道○徳○は○宗○教○の○根○底○を○得○て○初○め○て○眞
底○か○ら○實○行○せ○ら○れ○、眞○正○な○る○宗○教○的○信○仰○は○遂○に○道○徳○的○實○行○の○上○に○現○は
れ○て○來○る○の○で○あ○る○、眞○の○宗○教○の○根○底○を○缺○い○て○を○る○道○徳○は○そ○の○實○効○の○大
半○を○失○ひ○、縱○令○理○論○に○つ○み○形○式○に○於○て○完○備○し○て○を○つ○つ○も○、そ○の○實○際○上○の
感○化○實○効○に○於○て○尚○不○十○分○な○る○も○の○が○あ○る○の○で○あ○る○、又○宗○教○の○方○か○ら○云
へ○ば○そ○の○宗○教○上○の○信○仰○が○發○し○て○道○徳○の○方○面○に○活○動○し○て○來○な○い○様○な○も
の○は○不○完○全○な○信○仰○で○あ○り○缺○點○多○い○宗○教○と○い○は○な○け○れ○ば○な○ら○ぬ○、こ○の○點

から考へてみても徒らに厲つた神水に病氣の平癒を祈つたり、寒中裸體參して風を引き乍ら息災延命を神佛に祈願したり、口に宗教を談じ乍ら少しも道德の實行に努めないうて孝經で親の頭をはるやうなことをしたり巫覡の言に左右されて徒に神降かみぞりなどを信じ、いやに荒誕不稽の怪事を談ずることばかりを喜んでをるが如きは、眞の宗教的信仰といへぬのである。實に理論の側に於ては信仰と知識が到底離す可らざる密接不離の關係をもつてを、たと同じ様に實踐の側に於ては宗教と道德は到底離す可らざる親密の關係を有つてをるのである。宗教の根底を缺いた道德は淺薄であつて道德の實用その大半を失つてしまふし、道德の實行上に發表して來ない宗教は不健全なる信仰變態的信仰である。それは遂に迷信に陥らざるを得ば幸である。道德、宗教の兩者は恰も鳥の双翼車の兩輪の如く、決して偏廢す可らざるもので、此兩者平行して進むべきである。是れ宗教と道德と善く調和した倫理的宗教

に至つて、宗教の發達その頂點に達する所以である。

かやうに基督教でいへばゴッド、佛教でいへば如來の觀念に於て、初めて道德、宗教の二つがその極度に達し、之を以て最終の根本義として此に此兩者は全然一致合躰し、此にその同一の根底に到達したのである。此根本義に立つて之を云へば、道德も宗教も畢竟同一である。共にゴッド、如來の觀念を根底として起つてをるのである。然し翻つてその差異點を云へば、宗教とはこの如來又はゴッド即ち神かみなるものと人との關係を指すものであつて、道德とは寧ろ人と人との關係の規定である。宗教は人とゴッド又は如來の關係であるから、絕對と相對の關係であるし、道德は人と人との關係であるから、相對と相對との關係である。宗教は相對的従つて有限なる人が絕對即ち無限に對し、之と一致し、之に由つて救はれやうとするのであるから、これは人から云へば、向上的活動である。之に反して、道德詳しく云へば、宗教的道德の如きは、絕對者

又は無限者たる神の信仰を基礎にして、神が土塵となつて各個人互に相愛し相親まなければならぬと云ふことを説き、愛神といふことを根本義として初めて愛人の道徳が出て来るのであるから、この點からいへば假に之を向下的活動といふことが出来やう、詳言すれば最高至上の原理である神の信仰を基礎にして、更に神より卑き人と人との間を律するのが宗教的道徳であるから、此點から宗教的道徳は向下的活動であるといふことが出来る、それであるから親鸞聖人は、

得_レ至_ル蓮華藏世界即證眞如法性身_ヲ
遊_レ煩惱林現神通入生死苑示應化_ヲ教行信證_ヲ

といはれた、則ち初の二句得至蓮華藏世界即證眞如法性身は向上的修養であつて後の二句遊煩惱林現神通入生死苑示應化は向下的活動である、それであるから親鸞は此二句に由つて道徳は向下的であることを示してをるのである、是れ實に道徳と宗教の差異點である。

既に第三講に於て説明した通り、晩近流行の信仰論は、宗教は實驗であり實感であり又自覺であるといふことを説いてをるといふことを述べ、聊かその論旨を批評したが、今又之と相呼應して、宗教は反倫理であつて倫理などはどうでも善い元來絶対に根據を有してをる宗教は、倫理の如き相對界の規約に由つて律せらるべきものでない、こんなものに齷齪拘泥す可きでない、倫理に反する所却て宗教の眞價が存するのであると、かう云ふのが宗教の反倫理説である、然しこの説の極端であつて中正を得ぬことは、以上本講にて説明した所に照せば自ら明かであるが、抑近時かう云ふ見解の行はれて來たのは、私の見る所では一種の反動であると思ふ、それは一派の論者が荐に宗教の倫理的方面を過重して、宗教は何でも倫理的でなければならぬ、否寧ろ將來の宗教は倫理である、倫理の實行その儘が宗教であるとかう唱へて、宗教の位置を全く倫理に奪つてしまはうとした、さうして彼鐘を叩いて經を讀み

木魚を鳴らして念佛する如きことは、眞個に馬鹿々々しい死んだ儀式である。虚禮であり虚式である。宜しくこんなものは廢してしまつて、宗教の實踐は一に道德倫理を以てす可し、實に將來の宗教は倫理にて事足るので、倫理即ち宗教であるとかう云ふことを稱へて、此種の論者中には、倫理運動などいふものを、歐米に唱道する者が有るに至つたのである。斯く宗教は倫理に外ならないと云つて、宗教を全く倫理に吸収して、倫理即宗教説を主張する者がある。反動として、此に宗教は倫理などの爲めに拘束される可きものでない、倫理に反した所に、宗教の本領があるといふ、宗教の反倫理説が起つて來たので、それであるから、宗教の反倫理説は宗教即倫理説の反動として起つたのである。併しそれが反動である丈、それ丈宗教の反倫理説は一方の様端に走つてをるのである。既に迷信を論ずる條下に於て、私は迷信を判定する一つの標準は道德に反するといふこと即ち反倫理といふことに在るといふことを申し

述べたが、若し論者の如く宗教に反倫理の性質があるものであつたらば、それは迷信と何等の擇ぶ所なきに至るものである。否、それは既に一步迷信の中間入をしたものと云はなければならぬ。此點から云つても、宗教の反倫理説は到底穩當でないことが分る。本講に於ても申し述べた通り、宗教と倫理は非常に密接の關係があるものであつて、その關係恰も鳥の双翼車の兩輪の如く、唇齒輔車互に相待ち相資く可き性質の者でこそあれ、決して背反矛盾す可きものでないと云ふことは明かである。それを何ぞや、宗教は反倫理であると説くは、説く者が誤つてをるといふことが分るのである。宗教の反倫理を主張することの極端なることは、宗教即倫理説を鼓吹する論者の極端なると同一である。固より宗教も道德も共にゴッド如來の如き絶對者を以て兩者の根本原理とする以上は、この點に於て倫理は宗教に全然一致し、倫理即宗教であるといつてもよいが、併し此點のみを見て他の點を看過してはならない。

他の點といふのは別でもない、宗教は神即ち絶對者と人との關係であるが、倫理は人と人との關係であるといふ特性である、この宗教と倫理の相違點を漫然看過して、直に宗教即倫理説を主張するものは又一方の極端に奔り過ぎたものといはなければならぬ、此に於てか私は宗教と倫理は究竟の點に於ては合一するものであるといふことを主張する、換言すればゴッドとか神とか云へる絶對者實在を根本義としてをるといふ點に於て、宗教も倫理も全く合一してしまふといふことを主張するもので、則ち私は宗教と倫理の究竟合一説である併し、が實際社會に役立つてをる働き方、活動の方面は大に異なるので、宗教は相對の人間を導きて絶對者に引入し、道德は單に人と人とを律する相對界内の出來事として働いて行くのである、この點に於て宗教と道德の相違を認めるのである、簡單に云へば宗教と倫理の一致するのは究竟の點迄押し詰め、た所に在るので、その究竟の所に迄至らぬ間は、各異つた

方面を有つてをるといふことを認容する、是れが、則ち宗教と倫理の究竟合一説である、私のいふ此の宗教と倫理の究竟合一説のことを、世間では宗教の超倫理説と稱してをる、詳言すれば宗教は倫理と全く同一のものではないが、又倫理と全然反對するものでもない、寧ろ宗教は人と人との關係に倫理の本領以上に進んで、人と神との關係を規定するものであるから、此點、かち宗教は倫理以上、即ち超倫理であるとかう主張するのである。

世間では善く宗教的道德に對してかういふ非難をする、則ち宗教的道德は神とか佛とかいふものを立て、その命令として道德を實行することを勧めるから、他律道德に爲つて自律道德の性質を全く缺いてをる、然るに道德の精髓は全く自律的である所に存してをるので、他律的道德は奴隸道德である否、道德ではなくて、法律であるといふ非難を、宗教的道德の上に與へる人がある、是は一應尤もな非難である、併しこ

の非難は猶太教婆羅門教のやうな[○]律法的[○]宗教[○]の教ふる道德を非難するものとしては正鵠に當つてをるのであるが、基督教佛教の如き倫理的宗教に至つては毫もこの非難を蒙る理由がないのである。その譯は律法的宗教ではまだ神の法律と人の精神とが全く一致してをらぬ神は高い所に居つて卑い所の人間を支配し、神の掟は人間の上に無理に蒙らせられた桎梏の様なものである。是れは律法的宗教の通患である。然るに今一步を進めて倫理的[○]宗教[○]になると、神と人とが全然合躰し、神人融合相對絶對一致の上に成り立つた宗教で、かういふ宗教の有つてをる宗教的[○]道德は、上下疏通内外一致融通圓滿の上に成り立つた道德であるから、此に至つて他律自律の兩者が全然一に歸して、相即圓融の妙境に到達したのである。前に云つた通り神の掟と道德の法則とが全然一致し、Moral law が Divine law に合躰してしまつた状態になつたのである。此に至れば最早や自律他律以上の沙汰で、自律他律の區別は全く

無くなつてしまつたのである。自力他力の差別は全く没却せられてしまつたのである。自力といふも他力に對した相對の自力でなく、絶對自力であるし、他力といふも自力に對した相對他力でなくて絶對他力である。此に至れば寧ろ自力他力の區別は全く無くなつてしまふのである。自律的[○]道德[○]といふも他律的[○]道德[○]に對した自律的[○]道德[○]ではない、又他律的[○]道德[○]といふも自律的[○]道德[○]に對した他律的[○]道德[○]ではない、自律他律的[○]相對[○]を没却し盡した絶對的[○]自律[○]絶對的[○]他律[○]である。故に之を自律的[○]といふも可なれば他律的[○]と呼ぶも固より不可はないので、實は自律的[○]他律的[○]以上の妙境界[○]の真相[○]であつて、言語思慮の能く及ぶ所でないのである。此に至つて自律道德と他律道德が全く一致した境界[○]といふの外はない。それであるからベルナルツスは、此至境に到達した者は己を愛するにしても神の爲めに己を愛するのであるとかういつた神の爲めに己を愛す、言ひ換へれば己を愛する行が取りも直さず神を愛する

ことになつてゐるので、普通ならば己を愛すと云へば他人はどうでもよい自分さへ善ければといふ我利々々主義に外ならないのであるが、深く宗教の堂奥に迄這入つた者から見れば、一視同仁博愛平等で他人を見ること自己を視るが如しといふ妙境に躰達してゐるのだから、己を愛するといふ行爲が取りも直さず神を愛する行爲になつてゐる。治生産業皆實相の佛行になつて行くのである。元來我は如來の光明中に攝取せられてゐる神の榮光中の人間である。形骸こそ此世に在つて生死の凡夫であるけれども心は淨土に住み遊んでゐる。佛と我とは同一躰である以上は、この絶對の立脚地から眺めてみれば、己を愛する行爲が直に神を愛する行爲であるといふことは毫末も疑ふ可らざる事である。否寧ろ當り前の事といはなければならぬ。此絶對界の極致を顯してゐる倫理的宗教の極意に躰達して來た以上は、最早や自律的道德他律的道德などいふ相對界の區別は全く眼中にないのである。自律

他律の爭論以上である。所謂超道德の眞實界であるといふの外はないのである。此境界に上つて見れば自律他律の爭論の如きは全く相對差別に拘泥した戲論に過ぎぬので、天井裏で鼠の騒いでゐる程の感じもしないのである。此見識から行くから親鸞聖人は歎異鈔に於て。

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生は遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひたつ心の起るとき、則ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり、彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要すと知るべし、その故は罪惡深重煩惱熾盛の衆生を、たすけん爲めの願にましますしかれば、本願を信ぜんには、佗の善も惡にあらず、念佛にまざるべき善なきゆへに、惡をもあそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきゆへに。

煩惱具足の我等は、いづれの行にても、生死を離ることあるべからざるを、あはれみたまひて、願を起したまふ本意、惡人成佛のためなれば、

他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なりよりて善人だに往生すまして悪人はと仰せられたり。

とかう喝破されたのである、よくその真意のある所を味はんければならぬ、彌陀の誓願不思議で、即ち絶対界の位置に到達した者の眼から見れば、真にかうてなければならぬ、實に小氣味善いキビ、した云ひ方である、禪宗で佛を呵し祖を呵すと云ふもこゝである、一休が元日に舍利頭をかつき回つたと云ふのも全くこゝである、而もその裏に立ち這入つてその反對から云つて見れば、如何なる小善をも捨つることなく如何なる小悪も犯すことなく、能く如實に修行することが大切なので、相對差別の世界からいへば、矢張諸惡莫作諸善奉行自淨其意是諸佛敎に外ならないので、親鸞聖人の真意も亦實に此に在る、絶対界からいへばこそ。

本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して

煩惱菩提體無二と すみやかにとくさとらしむ

又 罪障功德の躰となる 氷と水のごとくにて
氷多きに水多し さわり多きに徳多し

又 無碍光の利益より 威徳廣大の信をえて
かならず煩惱の氷とけ すなわち菩提の水となる(和讃)

とかういふことになるのである、これは親鸞聖人と餘程毛色の違つた維摩經にも又同じやうに説かれてをるので、大乘佛教は主として真如絶対即ち平等界佛の境界から立論するから多くかうなるのである、それを以て真に何等の考慮もなく無暗矢鱈に、相對差別の世界の事柄である倫理道德の上に適用しやうといふのは、云はば法の適用を誤つたものといはなければならぬ、維摩經にはかういふことが説いてある、こ

れ又絶對平等界から立論したから親鸞聖人の和讃や歎異鈔と同一意に出で來てをるので其句調文辭迄も餘程能く似てをる。

高原陸地不生蓮葉卑濕淤泥乃生此華如是見無爲法入正位者終不復能生於佛法煩惱泥中乃有衆生起佛法耳。

是故當知一切煩惱爲如來種譬如不下巨海不能得無價寶珠如是不入煩惱大海則不能得一切智寶。

絶對界に上りつめた者の眼から見れば實にかうでなくてはならぬ併し之が爲めに一概に親鸞聖人や維摩の教は不道德を教へるもの悪事を獎勵するものであると速断する譯には行かない則ち親鸞聖人も先づ第一佛に對して知恩報德の大切なることを示されて

信心すでにえひ人は つねに佛恩報ずべし。

又

如來大悲の恩德は 身をこにいても報ずべし

といはれ更に進んでは

師主知識の恩德も 骨を碎きても謝すべし

又

安樂國土にいたる人 五濁惡世にかへりては

釋迦尼のごとくにて 利益衆生はきはもなし

と説かれてをるこの利益衆生とは何であるかと云へば佛の道を説いて他人を利益しやうと云ふ利他の行ではないか従つてこの利他的行爲は世間普通の道德にも能く契つてをると云ふことは勿論である否それのみで無い親鸞聖人の御消息文なるものを見るに決して現世の道德を疎外視されぬばかりではなく大に之を獎勵され加之道德倫理の實行に努めぬ者は眞の信心を得た佛教信者ではないと叱責されさうして所謂宗教の反道德論者をして顔色なからしめ大に斯る徒を戒防されてをる長いけれども目下親鸞聖人を楯に取つて宗教の反道德

主義を鼓吹する者の頂門の針となり、大に吾人の参考になることであるからその主要なる本文丈を左に引抄して置かう。

各みな往生は一定とおぼしめすべし、さりながらも往生を願はせ給ふ人々の御なかにも御心得ぬことも候ひき、今もさこそ候はめと覺え候。法然聖人の御弟子のなかにも、此世には皆やう／＼に法文をいひかへて身もまどひ人をもまどはして煩ひあふて候ふめり、聖教の教をも見ずしらぬ各のやうにおはします人々は往生にさはりなしとばかり云ふをきいてあしさまに御心得あること多く候ひき、今さこそ候はめと覺え候、浄土の教もしらぬ信見房などの申ごとによりてひがさまにいよ／＼なりあはせ給ひ候ふらんを聞き候こそあさましく候へまづ各々の御心得は昔は彌陀の誓をもしらす。無明の酒に酔ひ臥して、三毒をのみ好み、候ひつるに佛の御誓をきいじめしより、無明の酔もやう／＼少しづゝさめ、

三毒をも少しづゝ好まずして、阿彌陀佛の薬をつねに好みめす身となりて、候ぞかし、然るになほ酔もさめやらぬにかさねて酔をすすめ、毒も消えやらぬに毒をすいめ候ふらんこそあさましく候へ煩惱具足の身なればとて心にまかせて身にもすまじきことをも許し、口にも云ふまじきことをも許し、意にも思ふまじきことをもゆるし、ていかに心もまゝにてあるべしと申しあふて候ふらんこそかへす／＼も不便に覺え候、酔もさめぬさきに尙酒をすいめ、毒も消えやらぬにいよ／＼毒をすいめんが如し、薬あり毒を好めと候ふらんこととはあるべうも候はず、佛の御誓をもきい念佛を申して、おはさん人々は此世から悪き事を厭ふしるしにこそ此身のあしき事をも厭ひ捨てんとおぼしめすしるしも候ふべし、はじめて佛の誓をきい、はじむる人々の善身のわろく心のわるきを思ひしりて、此身のやうにてはいかゞ往生せんずるといふ人にこそ煩惱具足した

る身なれば我心の善惡をば沙汰せず迎へ給ふとは申し候へかく聞きて後佛を信ぜんと思ふ心深くなりぬるにはまことに此身をも厭ひ流轉せんことを悲しみて深く誓をも信じ阿陀彌佛をもこのみ申しなんどする人はもとこそ心のまいにてあしきことをも思ひふるまひなどせしかども今はさやうの心を捨てんとおぼし召し給はこそ世を厭ふしるしにても候はめまことの心起らせ給はんにはいかでか昔の御心のまいにては候ふべき此の御中の人々も師をそしり善知識をかるしめ同行をもあなづり給ふよし候ふこそあさまし既に謗法の人なり五逆の人なり馴れむつ可からず淨土論にはかやうの人は佛法を信ずる心のなきより起るなりと候めり又至誠心の中には惡を好まん人には慎しみて遠かれ近く可らずとこそ説かれて候へ惡を好む人にも近づき善をせぬ人にも近づきなどすることは淨土に參りて後

衆生利益にかへりてこそさやうの罪人にもしたしみ近くはと候へ往生の金剛心の起ることは佛の御はからひより起りて候へば金剛心をとりに候はん人はよも師をそしり善知識をあなづりなどすることは候はじと覺え候へ
 とかういはれてをる此御消息文一つ讀んで見ても今日一派の論者がいつてをる様に宗教は反倫理でないことが分る流石は親鸞聖人の様な高德である宗教は反倫理などといふ不健全な事は毛髮も云つてをられぬ否相對の差別界に降つて考へれば宗教は倫理道德と相待たなければならぬといふことを咬んでふくめる様諄々説き示されてをる此事は大切なことであるから又モ一つ基督教の側から宗教は反倫理でなく倫理と能く一致合躰して行かねばならぬといふ實例を申し述べやうそれは有名なるヤコブの書翰新約全書であるヤコブの書翰にはかういふことが見えてをる

汝等道を行ふ者となるべし。…道をきくのみにて之を行はざる者は鏡に向ひて本來の面を見る人に似たり、かれ己を照し觀て去り後直に其如何なる相貌なりしかを忘る。…神なる父の前に潔くして穢なく事ふることは、孤子と寡婦を其患難の中にみまひ、又自守りて世に汚れざる是れなり。

人自ら信ありと言ひて、若し行なくんば、何の益あらんや、その信仰いかで彼を救ひ得んや、身若し靈魂離るれば死する如く、行離るれば死するなり。

親鸞又曰く

信と行と二つと聞けども、…行をはなれたる信はなし、…信を離れたる行なしと御思召す可し。

とかう云つてをる、此に親鸞の所謂行とは、必ずしも直に世間の道德實行を指してはをらぬが、兎に角以上の引證文に徴して、實踐の伴はない

信仰、道德を缺いてをる宗教は決してその本意でないといふことが佛教の側からも基督教の側からも明に知らるゝのである、實に親鸞聖人の思想は信心を得た者は世間の道德などはどうでも構はぬと云ふ様な淺薄なものではないのである、唯經文の一字一句に拘泥して全局に眼を注がない近眼者流ではいけない、是れ偏に宗派見に束縛された人々の通弊である、こゝは大に注意せねばならぬのである、親鸞聖人の眞意も是等の人の爲めに却て昏まされる様になる、これは宗派そのもの爲めから云つても大に遺憾なことである。

要するに宗教の眞面目は相對差別の偏見を打破して、絶對平等の眞境に融合する所に存するのである、それであるから保羅は宗教のこの眞境界を稱してかういつてをる。

爾曹は皆キリスト、イエスを信ずるに由つて神の子となれり、そは凡そバプテズマを受けてキリストに入る、爾曹はキリストを衣たる者

なればなり、斯る者の中にはユダヤ人またキリシヤ人或は奴隸或は自主或は男或は女の分なし、そは汝等皆キリスト、イエスに由つて一なればなり、

とかう云つてをる。

釋迦も亦之と同様のことを説かれてをる、則ち、

四大河入海已無復本名字、但名爲海、此亦如是、有四姓……於如來處剃除鬚髮、著三法衣、出家學道、無復本姓、但言沙門釋迦子……除去結使、入於無畏涅槃城、(增一阿含)

と、是れ實に宗教の極致眞境界である、人は各自身に修養以て此に至らねばならぬ、宗教的の道德は一度この絶對平等の眞實境に躰達した後、再び相對差別の世界に降つて來て、世間一般の道德を障礙なく實行することを教へ、入つては孝子となり、出ては忠臣となりて君國の威光を宣揚し、農に商に工に各その本分を盡して、而も世情に執着せず、世間の

名聞利養の中に栖息しながら又名聞利養を追ひながら自ら名聞利養の上を行くといふ所に宗教的の道德の云ふに云はれぬ妙味がある所である、朱文公は此妙味をかう云ふ風に諷詠してをる、

步隨流水覓溪源、行到源頭却惘然、始知眞源行不到、倚筇隨處弄潺湲、

之を基督教では更生リバイバルといひ、又永生イターナル、ライフを得た人といひ、眞宗では還相廻向と稱するのである、直指端的の禪宗は又かういふ風に教へてをる。

活人をころし盡して初めて活人を得、活所を得んと欲せば須く死所に就いて求むべし。(東嶺)

と、是れ實に耶蘇が、

我が爲めに生命を失ふ者は實はその生命を得るのである。

と云はれたのと同じ轍に出ててをるのである、俗にも

實^みを捨て、又實^みを救ふ貝杓子
世を捨て、又世を救ふ善知識

と云つてをる、自己の名聞だとか財産だとかいふことに執着してをるやうなことは、何事も出来るものでない、一度しつかり世の中を見捨て、しまつて初めて大活動も出来大飛躍も出来るのである、眞に世を厭ふものにして初めて眞に世を樂み活社會に立つて活生活が營めるのである、眞の厭世家にして初めて眞の濟世が出来るのである、徒に我身一身の事にくよくよく屈托してをる様なことでは、世の中は救へない濟世利民の大事業は出来ない、博愛慈悲の道德は實行出来ないのである、自分の身分が他人より卑いとか高いとかいふ様なことに齟齬してをるやうなことは、一視同仁とか慈眼衆生平等一子とかいふ宗教的道德の神髓は實行出来ないのである、修養自ら悟後の眞境に達し倚節隨處弄潺湲ものでなければ自淨其意と云ふことも出来ず、従つてどん

な些細な事柄でも、自己の責任となつたことは、遲滞なく遣つてのけるといふ勇氣も出て来ないのである前にもいつた

一萬や二萬の富はありとも

今日一日の勤大切

といふ、この勤即ち本務が、心安く出来るやうになるのは、自己の本務を以て眞に我をその光明の中に攝取し給はつた神佛から命ぜられた天職である、否實は神佛の御力に依つてさして貰ふのである、誠に難有とであると喜び勇んでやる様になつて初め出来るので、之が宗教的道德の本義に躰達した者と謂ふので、宗教的道德が世俗的道德に一頭地を抜いて實際に有力なるのも亦この呼吸に在る、則ちそは一に確固たる信念に依るからの事であると謂はなければならぬ、人は眞個に能く修養以て此眞境に到達す可きである、(尙参考篇二の末文を参照して貰ひ度い)

第五講 宗教と教育の関係

道徳の究理理想としての宗教と教育——修身授教上の實例——教育上人格の完成と宗教的感情の涵養——家庭と學校の聯絡上から見たる宗教の位置——國民教育の目的と宗教——迷信は諸有人文現象即ち道徳宗教々々の公敵——迷信打破の必要とその方法

前講で私は道徳と宗教の關係を論定して、道徳の方面に活動して來ない宗教は不完全である、動もすると迷信の亂濁に陥るし、之と同じく宗教の根底がない道徳は、玉の盃の底なきが如く、龍を書いて眼睛を點ぜざるものであるといふことを述べ、道徳も宗教もその極致に至れば畢竟一に歸してしまふのであるといふことを辯明して置いたが、今此點から宗教と教育の關係を考察して見れば、又自らその真相が分るだらうと思ふ、則ち教育の目的は何であるかといへば、人間が人間として立派に道徳を行つて天地に耻づかしくない様にして行ける所の人物

を養成するといふのがその目的であらう、教育の目的は獨り人を道徳的に完全にするに云ふ計りでは有りませぬ、教育の目的の一つは、確に人をして道徳的に完全にするといふことであらうと思ふ、否な人を道徳的に完全な人物にするといふことは教育の大切な目的であらうと思ふ、然るに前に論明した通り道徳と宗教の關係は如何にも密接であつて、この兩者の双進并進行を期さんければならぬことは、鳥の双翼車の兩輪の如きものである以上は、その道徳の完成といふことを、一つの大目的としてをる教育は、世間多くの人が妙に誤解してをる様に、宗教を全く疎外視して宜きものであらうか、宗教を全く敵の様に思つてそれ教育の目的を完成することが出來やうか、少くとも教育上重大なる位置を占めてをる徳育といふものを、宗教を蔑視して完全に成就することが出來やうか、是れ實に私とも改めて斷案を下す迄もなく、聰明なる聴講者諸彦は疾くにその不可能なることを御賢察のことであ

らうと思ふ、教育家は徳育の必要なことを能く／＼認めて居られながら、前講で云つた通り徳育に缺く可らざる宗教になると妙に反情を懷いて、自分には何といふ理由もなしに教育家互に雷同附和して宗教を排斥してしまふ形跡があるのは眞に可笑いことである、是は眞に教育家のもつてをる偏見即ち一種の迷信 Tolma といはねばならぬ、今日の教育家がかういふ排宗教熱に浮かされてをるのは色々の原因はあらうが、私の一寸數へた所でも、その重なるものが三つ程ある、その第一は宗教と迷信を同一視してこの兩者の區別を劃然と認めて居ないといふこと、詳しくいへば宗教とさへ云へば佛蘭西の實證哲學者コムトの様に、神話的宗教や劣等人文教などの極初步の幼稚な宗教と思ひ、水天宮様の御符を戴いたり方角除の御符を信じたり、腐つた神水を飲んで病氣平癒を祈つたり賣卜者の言に誰かされたり太陽を崇拜したりするのを以て宗教と見做し、かういふ迷信であるから宗教は信ずるに足

らない、道徳に害があるとも益がないとかう一概に論じ附けてしまふのである、かういふ論者は私の前講つた倫理的宗教の如き高等な位置に在る宗教のとは一向見向きもしないで居つて、又偶之に見向いて極皮想の解釋をやるに過ぎないで、單に初步劣等な過去の歴史中に葬り去られて居る宗教を宗教の全體であるかの様に云ひ做して、宗教は迷信である神聖なる教育に近づく可らずとかういふけれども、これはコムト同じ謬に陥つたので、論者自ら宗教のことを能く知らないといふことを自白し、自分の識力のないことの恥囁しをする様なものであるから、神聖な教育者の面目を保つといふ上からも、自分でちと謹慎してもらいたいのである、かう云ふ人は宗教學の書物の一冊も讀んでから宗教の事を云々してもらひ度のである、さうでないで折角の御名論——實は誤謬論(阿々)——も自ら謬り又他人をも謬る様になつて、寸益なくして尺害を生ずるといふ結果になるから大に注意を請ひ度ので

ある、宗教を迷信と同一視するのはベークンの云つた通り、人間を猿と誤るのであつて、能く似て居つても非常に違ふものを一に見る謬である、第二には東西とも十九世紀全株の風潮として、物質科學が大進歩をした爲め人々科學萬能主義に酔つたといふ結果である、是れ又明にコムトの科學萬能主義の思想に由て風靡されたものといはなければならぬ、併し宗教と科學は決して矛盾はしないのである、物理學化學などといふ物質不滅勢用恒在(エネルギー不滅)の法則を認め、生物學ていふ進化の天則を承認しても、尙是れ以上に真正なる宗教の存立する餘地が優に存してゐるので、眞の宗教の本領は確にこゝに在る、而も眞の宗教は是等の科學思想と決して衝突しないのみでなく、所有科學の外助を得て益その眞の光明を發揮して來るのである、科學の隆盛を見て宗教無用説を唱ふるものは科學に酔ふた人である、その實夫子自らにも科學の本性真相が能く御分りになつて居ないのである、科學を取り扱

ふ人でなくて科學に取扱はれる人である、科學の傀儡である、俗にも酒人を飲むといふとをいふが、人が酒を飲んで居る中はよいが酒に飲まれてはおしまひである、科學を學ぶはよいが科學に飲まれ科學に酔つてしまつては仕方がない、西洋東洋を問はず十九世紀一般の風潮である、科學萬能主義が世間を風靡してをつた上に、搦て加へて維新以來鎖國主義が一時に破れて、西洋物質の學問が汪洋として入り來り、人心を一掃した結果明治の教育は科學に飲まれてをると思ふ、然るに之を助くるに尙第三の原因がある、それは外でもない、徳川三百年間その勢力を占めて居つた儒教主義の教育が中流社會の頭腦に侵染してをつたといふ結果である、則ち儒教ではその祖孔子を初めとして、怪力亂神を語らず性と天道とは成るべく云はぬ主義で、宗教の本義とする絶對者神のことは高閣に束ねて敬遠主義を取つたのである、して一方では儒者が無暗に佛教を貶したのが原因となつて、徳川三百年間といふもの

は我國中流社會には純粹なる宗教思想といふものは全く枯渇してしまつて、宗教は單に死人の取り扱ひ道具に過ぎぬといふ哀れ慕なき有様になつてをうた、第四講でも云つた通り宗教的でないといふことが儒教の長所でもあらうが又その一大短所といはなければならぬので、それは動もすれば乾燥無味に流れ温き心情を缺いて心絃相觸れる所の宗教的情操を缺いてをる爲め、その道徳は動もすれば虚式に流れ外形の末に拘泥して精神の本を忘れるといふ律法主義に陥らんとする弊を生ずるのである。かの徳川家康が文教を興し儒教を幕府の官學としてその三百年間此儒教といふ無宗教的思想を我國中流社會の精神に注入し、加ふるに之と結び附いた武士道が又實際に於て無宗教的であつて所謂心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らん主義であるから、是等の儒教や武士道に養成された徳川三百年間の士大夫が、自然無宗教的思想に傾いてをうたのは偶然でないので、明治維新以後

になつてからは、主として是等の中流人士が我國の教育を司る様になつてから、自然今日の教育家が宗教に冷淡であり、宗教とさへいへば早飲み込みに丸で迷信だと思ふ様になつたのも又止むを得ないのである。そこへ持つて行つて佛蘭西のコムト一派の實證哲學即ち科學萬能主義の影響と共に、佛蘭西の加特力教を教育社會から排斥しやうといふ非宗教的教育主義が輸入されて、教育家なるものが之に雷同附和して一も二もなく前後の分別もせず、教育宗教の分離説を主張し、宗教を教育から排斥さへすればそれで彼等の能事了はれりといふ様に意氣得々たる有様である。實にその思想の淺薄にして浮誇なるに驚かさざるを得ない。彼等が眞の宗教と迷信とを十把一束に考へてをる所は眞個に菽麥を辨ぜざるものと謂はざるを得ない。その偏見や寧ろ憐む可きである。私は教育家にどうか宗教學書の一冊なりと讀んで貰ひ度く思ふ。然し是は上に教育家その人の罪ばかりではないので、前に云つた

様に徳川三百年以來の弊風の馴致した所から來たので、實は社會の罪である時代の罪である教育制度の罪であるといはなければならぬ。實は此間も私の知つてをる某小學校の先生がかういふことを云つてこぼしてをつた、即ち小學校の尋常科の生徒位の程度のものに、正直といふことを教へるのに、教科書に由ると皆正直にさへすれば御褒美が貰へるとか大變名高くなるとか云ふ様に説いてあるので、正直といふことがつまり自分の爲めである自分が名譽利得を得る爲めであるといふ様に兒童の腦髓に印象する、その例話としてはワシントンが子供の時父の愛する櫻の木を伐り倒してしまつた、父は愛木の倒れて居るのを見て大に驚いて誰が伐つたかと詰問した、その時ワシントンは小言をいはれることを恐れたけれども、詐を云はないで、自分がその櫻の木を伐り倒したことを父に自白した、かく正直なるワシントンといふ人はその場で直に父にも褒められ後に至つて遂に大統領となつて

大なる名譽を得た、それであるから人はどうしても正直にせねばならぬ、それが自然自分の爲めであるとかう教へてをる、然しどうも之では尙効果が少ない様で、正直な事としても後で自分の爲めにならない場合が澤山世の中には出てくるものだから此場合に於ては兒童の質問に對して甚困る、之に反して宗教的に、正直にさへすれば人は見ないでも神や佛が覽てをられるとかう云へば、非常に効果もあり従つて兒童の心に成る程と眞に分るらしいのである、手つ取り早いのである、然るに小學校の規則上神や佛のことは云へないのである、之をいはないで實際に効果の有る様に修身科の教授をするには、どうしたらよからうか、どうも分らないで困つてをるとかういふことをいつてをつた、そこで私はかういつた、それならいつそ非宗教的な儒教の天道といふ考を以て來て、天道様が見てをるとかういつたらどうであるかといふと、小學校の先生のいふに、兒童の幼少な腦髓にはそんな儒教のいふ様な無

形な道即ち天道といふ様なことは遣入らない、小供は天道様といへば太陽のことだと思つてしまふ、さうすると太陽崇拜といふ迷信を兒童に吹き込むことになつてしまふので、天然崇拜の如き劣等宗教を以て兒童に強ふることになるから、さうはいへない、矢張こまつたものである、正直にすれば後には立身出世をすゝめるとかなんとかいへば、結局あなただの云はるゝ世俗的道德である、利己主義道德になり、進化論的利己主義か功利主義か快樂主義かになつて仕舞はなければならぬ、それはどうも効果がない、といつて又規則上宗教のとは一口も云へないし、さうかといつて儒教の天では無形のもので兒童には分らないし、矧や哲學者の絶對などいふとでは尙更子供には分らない、どうすればよいか、誠に小學校の修身の教授には困つたものである、我々教師も唯その日その日の日暮といつた様な風で、効果ある修身の教授の出來ないには眞に困ると、かうこぼしてをつた、然し私の考へる所では、何にもそんな

なに困つたことはない、教育界が今少し寛容な料簡にさへなればよい、自分で造つた法律で自分が束縛されさへしなればよい、商鞅の様に自繩自縛をやらなければよい、自分の心から病み出した排宗教熱にさへ浮されなければ善い、高等劣等一切の宗教は皆迷信だといふ教育家自己の迷信にさへ束縛されなければよい、寛く門戸を開放して如何なる宗教も取つて以て修身道德の資料となし、是等を一切自己藥籠中のものとして修身の上に活用自在にする丈の雅量さへあれば善い、修身科の教授が此點に至れば佛教を信じてをる者には、大悲ものうきことなくて常に我身を照すと教へ、基督教を信じてをるものには、神の照覽と説けばよい、詰り佛教といはず基督教といはず、神でも佛でも凡て教育上有益有効なものは迷信に非ざる以上は皆收め來つて修養の根本義とすれば善いのである、敢て佛教とか基督教とかいふ一家一派の門戸に抱泥しないで、眞理は諸宗教皆共通であるから、その眞理なるもの

は取つて以て修身科教授の資料に供するが善い。斯くすれば前講に於て述べた様に、宗教といふ大根底あり大基礎ある道徳が出来上つて、修身科の教授は完璧の域に達することが出来るのである。元來渾然たる一體で離さうと思つても離すことの出来ぬ道徳宗教の兩者をさう人工的に分離しやうといふのが抑の誤である。

又更に翻つて教育の目的を考へてみるに、教育とは畢竟人格の完成を期することである。人格の完成といふ中には色々などが含まれてゐるにしても、智情意の發達を圓滿にするといふことは明かである。然らばその情育の中に、高尚なる宗教的感情の涵養は決して之を無視することの出来ないものである。勿論迷信と相距る遠からぬ様な宗教的感情は容赦なく教育の力で打破してしまはなければならぬが、その代り崇高な宗教的情操例之神の愛とか佛の慈悲とかいふ様な高尚な情操は傷けるどころか涵養に涵養を力めなければならぬ。西洋では多

く、學校教育と教會とが相待つて、此感情の涵養に努めるが、日本では教育者と寺院とか相待つて之を破壊しやうとしてゐる。之は西洋と反對である。則ち教育者は宗教を一切迷信だと云つて外部から攻撃するし、寺院は宗教を以て死人の取扱をするもの活世界に用なきものである。として自己の行爲に由つて内部から宗教を殄滅しにかゝつて居ることは西洋と正反對である。かういふ風では國民の道徳を進め、風教を維持して行くなどといふことは決して思も寄らぬので、従つて學校教育の効果は何時完全に擧るか分らないのである。教育家がこゝを深く慮らないのは自分で自分の仕事を破壊して行く様なものである。右の手で建設し乍ら左の手ですぐ其あとから破壊しにかゝつて行く様なものである。此所一番教育家たる者は猛省すべきである。

若し又學校と家庭の連絡上から宗教を見たらどうか、今日兒童の家庭では何等かの宗教を奉じて居らぬものは先づない。従つて兒童は家

庭に於て知らず識らず何等かの宗教に影響されてをる然るに之を學校の先生が譯もなく頭から——その實宗教の事は先生自ら分りもしないのに——迷信だなどといつてぶつつぶしにかゝるのは第一家庭教育と學校教育との間に一大分裂を生じその結果兒童の觀念界を紊亂し錯雜せしむるといふ點に於て教育上から見ても大害であるこゝは教育者が十分宗教といふことに精通しその上でまこと家庭の宗教が迷信なら迷信の様に漸を以て之に染つた兒童を善導して行つたならば兒童の爲めから云つても教育の效果からいつても大層善いことであらうと思ふ若し宗教の事に精通した教育者から見ればこれなら家庭の宗教が正しい善良の宗教であると認めなければその宗教を利用してそれが教育の根底となる様に兒童を導いて行つたならば學校教育と家庭との間に極順當な聯絡が附いて至極好都合に行くであらうと思ふ。

勿論國民教育と宗教とは自ら異なる目的を有つてをるので一般普通の國民教育に在りてはその國民の繁榮發達の完成といふことが最終の目的理想となつてをるから發達した宗教が既に國民といふ圈套を脱して世界的普遍的になつてをるものとは多少趣を異にしてをる所がある従つて此兩者を全く同一に取り扱へといふ譯ではないそれであるから今俄に佛教とか基督教とかいふ特種の成立宗教を國民教育の中に引き入れて禮拜儀式等一切その一に由つて國民教育を律せよといふ譯では毛頭ない是等は昔の國教主義を今日に夢みてをるので我憲法にも信教の自由を明記された今日斯くの如くするのは人の信仰の自由を束縛するもので憲法の精神にも反する次第であるそれであるから私は國民教育の機關として某々の宗派を專用せよといふのではない唯國民教育が彼の人性の自然に出で人性の一大要求である宗教を無視してはならぬ蔑視してはならぬ之を敵視してはならぬ

る。教育は宗教を朋友とし之と共に手を携へ去就を興にして育英の事に従事せねばならぬと叫ぶのである。それは尙學問や道德が宗教を敵とせず寧ろ之と相融和して人文現象即ち世の中の文明に貢献せねばならぬと同一である。國民教育は強いて特種宗教の提灯持をする必要はないが又特種宗教を敵とするにも當らないのである。否國民教育に在りては國民としての品性を形作り國民としての人格が要求する限に於て人文現象の一たる宗教と相容れ手を握らねばならぬ。簡單にいへば國民教育に在りては國民としての一員が各要求し又それを以て自己の生命と迄思つてをる宗教を敵とせず是等の宗教的情操を害せず傷けず否却て都合善く發達する様培養を勤めねばならぬ。決して之を枯らす様な振舞があつてはならぬ。國民教育に在りては某々特種の宗教に偏せず黨せず宗教そのものは決して侮蔑す可きものでなく却て尊重す可きものであることを教へ宗教は人性の至大なる要求で

あり貴重なる生命であるから何處の家庭にも皆是れを有し以て父母を初め兒童の在上者は之を尊び崇めてをるのである。所以を教へ兒童も決して之を侮蔑してはならぬ。否父母初めその在上者と同じく眞正なる信仰に入らんければならぬ。確固たる信仰に住さんければならぬ。學校の修身教授も決して之と悖るものでないといふことを明にして唯それ丈の事で兒童を導いて置けばそれで十分である。此點に於て國民教育に従事する者は特種宗教に偏せず黨せず唯宗教そのもの眞理を發揮せんと勤める。宗教學とその因縁は大層深いことになると思ふ。教育者たる者は一應宗教學上の知識を具へんければならぬと思ふ。世間では發達した宗教が英人とか米人とか日本人とか露西亞人とかいふ牆壁を設けず世界的普遍的であるのを見て大早計にも宗教は一國の隆盛繁榮を期する國民教育と相容れぬものである様に考へる人があるやうであるけれどもこれは非常な誤解から來たのである。近い

例を云つて見れば分ること、若しさういふならば一國一國に固有なる海陸軍の設備と、萬國赤十字事業の如き最も普遍的世界的の事業とは、拮据相容れないものと謂はなければならぬけれども、決してさうでない、歐米の列強皆一方ではその自己の國利民福の増進に營々として海陸の糺獄を養成して是れ日も足らぬと同時に、他方では赤十字の如き世界的事業に各はまり込んでやつてをるのである、此兩者は能く融和して行はれて行くのである、それであるから最も特種的な國民教育と最も世界的なる宗教とは、決して杆格して相戾る様なものではない、基督教の博愛や佛教の慈悲の教が、義勇奉公の國民教育と背くものではない、却て是等は陰陽相待ち剛柔相助くるが如く、平等差別の兩者相依り相輔けて、各自の天職本分を完うすることが出来るのである。

以上辯明した通り、真正の宗教は決して教育の敵ではない、教育者が真正の宗教迄恰もその敵の様に思つたのは、全く宗教と迷信を同一視

迷信は諸
有人文現
象即ち道
徳宗教々
育の公敵

迷信打破
の必要と
その方法

した教育家自身の誤解から來てをるので、宗教は決して教育の敵でない、寧ろその善友であり益友である、唯その敵とする所は迷信である、迷信の恐る可きことは實に非常なるものである、之は教育家が鼓を鳴して攻めんければならぬ所のものである、否、それは獨り教育家のみでない、宗教家も亦之が勦絶を期さんければならない、なぜならば真正の宗教を濫す獅子身中の毒蟲とでもいふ可きものは迷信であるからである、否、迷信を敵とす可きものは、獨り教育宗教に止らないので、苟も人文現象の要素たるものは、道徳にまれ法律にまれ經濟にまれ何れの人文現象も皆迷信の勦滅を計らねばならぬ、簡言すれば迷信は一切人文現象の公敵、文明社會の危険なるパチルスである、と謂はねばならぬのである。

果して然らば迷信打破の方法如何といふに、最早や多言を要せぬのである、消極的に之を謂へば一切學術の利劍眞理の名刀是れなりと謂ふ可きである、一切の科學哲學の眞理は日々夜々迷信といふ妖怪退治

に盡瘁努力しつゝあるものである。科學哲學の進歩は流星を人魂と思ひ、流行病を惡魔の所爲と見る如き幾多幻妖の怪事迷信を打破しつゝあるのである。それであるから、ベークンは學術は迷信を治する安全の良藥であつて同時に眞正の宗教には忠實なる老僕であると云つた所以である。思ふに迷信を打破し盡して初めて眞正なる宗教を建設す可き土臺基礎が出来るのであるからである。併し科學哲學等一切の學術は迷信を打破し去つてしまつても之に代はるべき眞正の宗教を與へないと所謂龍を書いてその眼睛を點ぜざる殿を免れないのである。迷信は學術の力で理を詰めて來れば遂に打破し去ることを得るけれども、迷信を打破し去つてしまつた後には、之に代はる可き何かを與へなければならぬ。シオーベンハウエルの云つた通り、人は元來形而上的動物 *Animal metaphysicum* であつて、形而上の何か幽遠深玄なるものを求めて止まないものである。決して形而下の學術ばかりでは満足出來な

いのである。是れ、コムトの科學萬能主義の到底眞理でない證據である。今この人間の形而上的天性を満足せんが爲めに起つたものは、哲學と宗教の二つに外ならない。して哲學は抽象的なる頭腦を持つた哲學者てふ一種の専門家丈を満足さするに足るけれども、一般人類に向つて具體的なる宗教の役はせぬ。唯この役をするものは、宗教のみである。宗教は獨此要求を満たす唯一の機關であつて、人は食物無しには一日も生息することの出來ぬと同じ様に、宗教を缺いては一日も生活することが出來ぬのである。それではあるから、*Voltaire* は宗教上の神が實際存在して居ぬならば我々がそれを造つてその缺陷を満したらよいと絶叫した。コムトの如きも其哲學の初期に於ては實證論を稱へて宗教を激排し去つて之に代つて科學萬能主義を主張したが、後には宗教が無くては居られなくなつて來て、終に、人性教 *Religion de l'humanité* とし、コムト自己の發明になる一種の宗教を信じ、コムト自ら

熱心にそれを主張する坊主になつた所以で、是れに由つて考へて見ても、人は科學一點張では到底持ち切れないものであつて、その生來の形而上的性質は遂に何等かの宗教を要求し來つて止まないものであるといふことが分かる。ベークンが一寸ばかり學問の盃を口にした者は無神論者になるが、深く知識の活泉を味つた人は再び宗教に還るといつた言は、眞に吾人を欺かぬのである。要するに學術の利劍で迷信を打破し勦絶し盡すことは至極結構であるが、迷信を打破し去ると云ふ消極的事業丈では尙不満足なので、迷信を打破し去つた後へは、何か之に代はる可き積極的のものを與へてやらなければならぬ。さうせぬと切角の迷信打破も單に迷信打破としての効果を奏さないことになるのである。それは丁度兵力を以て旅順の如き遼陽の如き敵地を蹂躪し、その土地に在る敵の主力を殄滅してしまつても、唯それ丈に止めないで後からどしどし殖民でも送つてその土地に供給して占領を安全にする

必要があるし、かくして初めて干戈を以てその地の敵兵を一掃した功力も出て來るのである。今學術の利劍で迷信を一掃し去つた後は直に積極的に之に代はる可き眞正の宗教を以てしなければならぬ。斯くして初めて人々の形而上的本性も満足せられ、迷信の勦絶も功を奏するのである。社會に害毒を流して止むことのない迷信を打破するに、學術の利劍を以て之に加ふるのも何よりだが、此消極的事業に附け加ふるに、積極的には眞正の宗教を與ふるとが大に必要である。換言すれば純正なる宗教心の發揚程必要なるものは無いと思ふのである。この消極と積極、學術の利劍と純正なる宗教心、この兩者の共同盡力に由つて初めて迷信を勦絶して正信を得る完全なる成功を世に奏することが出来るのである。此點から考へても、眞正の宗教と學術とは矛盾す可きものでなく、つて學術と衝突するものは獨り迷信のみであるといふことが分るのである。従つて教育の敵は宗教そのものでなく、迷信こそ

教育宗教共同の大敵であると言ふことが分かるのである。教育者宗教家たる者徒に兄弟牆に閼くの愚を演ぜず互に相應援して内外一致以て此共同の外侮に當る臍を固め人文現象の爲めに盡す覺悟をせんければならぬ。

宗教講話本論終

この参考篇は前諸講の様に、通俗講演を目的としたものではなく、寧ろ研究的のものであるが、本講演殊にその第三講と第四講には、密接な關係を有してをるから、特に此に之を附加して、讀者の参考に供する次第である。

チーヒラー氏の信仰と知識

小引

本篇は獨逸國ストラスブルヒ大學の哲學正教授チーヒラー Ziegler 氏が、一八九九年五月同大學の總長に撰任せられたる時の就任論文にして、Glauben und Wissen と題せし者、を余が原著者チーヒラー氏の協賛を得て此に譯出し以て世に公にせし所のものなり、想ふに信仰對知識の問題は、人生と共に始終し、哲學宗教有りて以來、彼此相互に消長せし所の最大問題たらずんばあらず、然れば苟も宗教者哲學者たるもの、豈に沈思黙想靜に本問題の研鑽攻究に怠る可けんや、唯夫れ信仰對知識問題や、人生と共に始終し、哲學宗教と共に消長する所の最大問題なり、故にチーヒラー氏の原著が僅々二十頁餘の小論文にして、且つ一講演に過ぎざりしものなるにも關はらず、之れに向

ひて以て能く彼の古往今來、信仰對知識に關して糾紛錯綜せる大問題を捉へ來りて、之に一々詳細なる解答を與へよと叫ぶは眞個に不可能の難を他に責むるもの、實に氏は今回斯かる餘裕なかりしや固よりその所とす、然れど亦以て吾人は、氏の本論に由りて、現今歐洲に於ける思想界が如何なる方針に由りて斯問題の説明解釋に盡瘁しつゝあるかの景況一斑を窺ふに足るものあるを確認するは勿論、斯る問題の研究結果を世に公にするは、我國刻下の最大急務たるを信するが故に、余は今茲に、原著の大綱要領を、邦語を以て江湖に紹介せんとす、但し其行文措辭に至りては、一々原文にのみ拘泥し、以て徒らに歐文を解せざる讀者をして、難解の岐路に彷徨せしむるの迂を避け、東西事情を異にするに従ひ、彼此思想の徑庭するものあるに任せ、適宜原文を取捨増減して、之を抄拔述譯せり、要は義通し辭達して止むを期するに在るのみ。

一 科學哲學と實際的生活

近時獨逸に於て、彼の自然科學が、單に理論一方の研究にのみ止らずして、次第に吾人日常の實際生活に近接し來りしとは、世人の漸く着目する所となりしと雖も、精神科學特に哲學に至りては、吾人日常の生活上、些細の關係も無き、理論一片の空理なるが如く思惟せる、皮想論者尙ほ甚だ鮮からざるを見る、然れどニーチエが其著「善惡の彼岸」と題せる書に於て、哲學者の本領を論じ、眞の哲學者は單に眞理の探究者たるのみならず、同時に又吾人人生の實際的先覺者指導者たらざる可からずと主張せし所のものにして、果して眞なりとせば、吾人は彼の哲學なるものが、吾人人生に於ける日常生涯の上に及ぼす影響効果の、頗る偉大なるものありて存するを想見せずんば、あらず、然れど此點に關しては、余はニーチエよりも、寧ろヘーゲルが、その「法理哲學」の序に筆を擱くに當り、哲學の本領を論定して、哲學の人生を觀ずるや、全然抽象的理論的

なり、故にその人生を盡くや、紅顔の美少年として之れを描出するものに
あらずして、寧ろ瀕死の白頭翁として之れを寫象するものなり、知識の
女神ミテルダは、瞑想の鴟梟をして人生の黄昏と共に、其翱翔を初めし
むるものなりと云へる思想の、寧ろ穩當にして謙讓なる、少くともその
精神あるの多きを認めずんばあらず、果して彼のヘーゲルが考ふる如
くんば、哲學は吾人人生の現實的生涯を指導し、その處世の目的方針を
指定するものなりと謂はんより、寧ろそは却て單に現實に存在するも
の、理論的認識に止り、之れに依りてその中より理性的なるものと非
理性的なるものとを甄別判識し、以て漸く假定的に、吾人をしてその思
辨の歩武を進めしむると、寸許ならしむるに過ぎず、則ち瞑想の鴟梟は、
生活の黄昏を待ちて、此に漸くその翱翔を始むるものとす、今此點より
之れを言へば、哲學は吾人の實際的生活とは頗る隔絶分離したる消極
的のものとなり、哲學は彼のニーチェが惟へりし如く、吾人日常の生涯

を指定し、人生の行動云爲を指導し行く所の積極的實際的なる性質は
之れを闕如せるものと謂はざる可らざるなり。

二 哲學と宗教

彼の哲學者が能く自ら其本分を知り、甘んじてその劣位に安んじ居
るは、哲學がその冠位たる宗教に對向せし時より甚だしきものは未だ
曾て是れあらざるなり、則ち此場合に於ては哲學の職とする所は、新に
一宗教を創設せんとするものにあらずして、吾人をして既に存在する
所の宗教を理會領得せしめんとするに過ぎず、斯の如く一方より論ず
るときは、哲學が吾人々生に對する關係は頗る消極的にして、人生の日
常の生活とは餘り直接の關係なきもの、如く見ゆると雖も、彼の宗教
が哲學を待ちて初て理會領得せらるゝとせば、此點や頗て哲學をして
人日常の生活に鴻益ある切實密接の關係を有せしむるに至る所以
にして、此に至りて彼の深く人日常の生活と親密なる關係を有し而

も哲學の夙にその解答に努め怠らざりし所の問題ありて起り來るを見る、是れ宗教哲學の主要問題にして、輒ち余の今論せんと欲する信仰と知識の關係問題に外ならず、然れば此問題の解答は以て人生の實際的生活上に至大至重なる影響を及ぼし來るや分明なる事實にして、之れに關する吾人の知識は直に又吾人の實踐躬行を促し來り、其知は又頓て其行を生み來るものなるが故に、哲學は單に理論の一方にのみ偏せるものたるに止らずして、亦人生の實際的生活に資すると極めて多く、吾人日常の生涯に有用缺く可らざる最も實際的要具たるに至るものとす、故に余は今左に少しく此事實を諸種の實例に照して論明解説せんと欲す、是れ蓋し吾人の且暮其解答を得んとを冀待して止む能はざる所の問題なればなり、然り而して此問題の解釋を試みるに當り、吾人は先づ吾人の知識が如何にこの問題を解釋せんとせば、其應さに遭遇せざる可らざる幾多の難關ありて存するかを見るを得べく、而も吾

人は此問題の解釋を得んが爲に、吾人をして其羊腸の峻坂險路を通過經由せしめし後、更に再び坦々たる平道に出て來らしむるも、亦一に知識其ものにありて存するとを了知し得可きなり、何となれば、知識は吾人を傷害する鋭利なる殺人劍たると同時に、又其創痕をも醫癒する犀利なる活人劍なればなり。

三 信仰と知識の關係

抑て信仰對知識の問題は、古往今來頗る糾紛錯綜したる所の者なるが故に、決して單簡なるものにあらずして、頗る複雑なるものなり、その關係や決して平和的に非ずして、互に反目疾視し、時に或は流血杵を漂す底の慘狀悲觀を呈せしとありしは、人の能く知る所なり、然れば吾人は彼の往時に在りては、テルツリアヌスガ信仰に重きを置きて、不合理なるが故に余は信ずと絶叫し、以て哲學を貶黜して宗教を稱揚し、信仰知識の兩者は根本的に何等の關係も有せざるものと做し、宗教家は哲

學の批評的喧噪の囂々に寸毫も顧慮するを要せず、獨りその宗教の教ふる所を信受奉行せば則ち可なりとの熾盛燃るが如き宗教的狂熱の感情上、信仰をして全然知識以上に超出せしめ、信仰知識の兩者を一刀の下に截然兩斷せんとするの所見や、近代に於ては彼のストラウスが知識の側より信仰を觀察して、元來信仰と知識はその間、毫末も必然的關係を有するものにあらず、此兩者は畢竟路傍の行人、風馬牛の相及ざるが如く然り、此故に吾人哲學者たるものはその本分上、彼等宗教家を容るして能く各自その信ずる所を奉ぜしめん、然れば彼等宗教家も亦吾人哲學者を放任して毫末もその執る所の主義學說に關涉し追害するとなく、斯くして吾人は信仰知識の兩者をしてその從來動もすれば輒ち苦々しき慘狀を呈せし衝突反抗を歇めしめ、能く各自にその平和なる生涯の兩途を辿り行かしめんと、淡泊冷索の斷案を以て自ら甘んずる能はざるものとす、若し夫れ眞に彼のストラウスの惟へしが

如く、信仰知識の兩者をして截然相分別し各自互に相異れる領域を獨守せしむるを得ば、是れ實に至便の極とや言はん、然れどその不可能を如何せん、何となればストラウスの惟へりしが如く、信仰と知識、宗教と哲學の兩者は然く截然として全然互に分別切離し得可きものに非ざればなり、蓋し讀者は余の本論を讀了せらるゝ後に至りて自らその心に明知せらるゝものあらんが、信仰中にはその大部分既に知識の要素を以て充たさるるものにして、從ひて學者も亦自ら宗教信者たる者、少くとも能く宗教信者たり得可きものなり、蓋しゲーテの云へるが如く吾人は如何に理性を以て現實を除せんとするも其極到底之れを除し盡し得可らざるものあり、是れ知識の缺を補ふに信仰の援助を要する所以にして、如何なる人にも信仰と知識は其衷に竊に一致調和を求めつゝある亦實に此に存す、然れど彼の信仰にして一たび寺院的權勢威力を醗酵し來り、知識にして一たび嚴然たる一科の學術てふ勢

力を形成するに至りては、寺院と科學の兩者は歴史的に互に相反目疾視し衝突敵視するの止むを得ざるに至るものとす。

四 スコラ哲學に於ける信仰と知識の調和

今信仰と知識の衝突を調和して此兩者間に融合調和を成果したるが如き觀を呈せし時代ありしことは亦實に歴史上その例に匱しからず、彼の歐洲の中世紀に於けるスコラ哲學の時代の如き其一なり、スコラ哲學にありては哲學は神學の侍女にして知識は信仰の奴婢なり、神學や信仰は傲然として其冠位を占め哲學や知識に課するに奴婢從僕の劣業を以てし、宗教が既定せし所を擧げて之を哲學に附與し學術的に其證明論定に勤めしめたり、斯の如く西洋に於けるスコラ哲學の時代は上下擧りて平穩無事信仰知識の和合一致に昇平の安眠を貪れり、然れど獨り此の時に當り、之れを先にしては、アペラルツスの信仰知識のかゝる和合一致の危険なる調停たる所以を警醒せしあり、之れを後

にしては彼のスコラ哲學が専心神學に資せんとするの誠意は、哲學が認めて以て虚妄なりとなす所も亦宗教上眞理たるを得べく、哲學が認めて以て眞理なりと説く所のものも未だ必しも宗教上眞理なりと謂ふを得ず、宗教と哲學の兩者が論定する所は、畢竟別物なりとの、二重眞理の曲説をさへ醸成し來り、而して此二重眞理説や遂に彼のスコラ哲學が永年獨り自ら慘憺の經營を以て信仰知識の調停融和を試みたる煩瑣的工夫の被服をさへ破壊棄却し去り、信仰と知識とは茲に再び桎梏相容れざる破綻衝突を現はすに至りぬ。

五 十八世紀に於ける理性宗教

中世期スコラ哲學の時代に繼いで信仰知識の調和を圖らんと企てたる者は彼の十八世紀に於ける理性宗教是れなり、此時代にありては人人信仰を理性化せんと企て、彼の宗教が有する信仰にして其説明解釋に苦む諸種の困難なる思想は、遠慮會釋なく之れを除却し去りて

又寸毫も顧ることなし、彼れ理性宗教は惟へらく基督教の根本義は一に神の存在と意志の自由と靈魂不滅との三大思想に在りて存す、然れば吾人は單にこの思想の下に信仰と知識の調和を圖らんと試みれば則ち足ると、然れど彼の十八世紀に於ける理性宗教が自ら企劃せし信仰知識の調和は其實眞の調和に非ずして、彼の理性宗教がその奏功を確認したる信仰知識の調和は頓て彼の宗教をしてその蹤を斷たしめ、形而上學と道德とをして之れに代りて其位置を擅にせしむるに至れり、然るに彼の唯理的形而上學が認めて以て確實不變萬古の眞理なりと喚びし、神の存在や意志の自由や靈魂不滅の三大思想も、彼の舊物破壊を以て有名なる掃蕩哲學者カントに依りて、斯る思想は吾人の知識上に其眞實正確なる所以を論證することの、極て困難なる所以を指摘道破せらるゝに及びては、彼の唯理的形而上學が認めて以て萬古不變の眞理なりと爲しし所の理性宗教も、畢竟空中の樓閣沙上の輪奐、忽ち

其根底より動搖震撼し來り、理性宗教の企劃せし信仰と知識の調和も此に再び其破綻を見るに至れり、然り而て彼の十八世紀の理性宗教學者は其主張せし形而上學の全然唯理的なるにも關はず、尙超自然主義の下に古來宗教の超理性的傳説をも併せ容れんとを欲せしが故に、彼等が目して以て超理性的なりと傲し、所のものは全く背理性的なりとの反對的批難を蒙むるの止むを得ざるに了りぬ。

六

ヘーゲル及びその學徒の宗教對哲學問題の解釋

然るに十八九世紀の交に於て信仰知識の調和問題はヘーゲルの哲學上の天才に依りてさらに新解答を與へられたり、ヘーゲルは信仰と知識の兩者の衝突を調定してこの兩者間に打ち越し難き峭壁の削立せるに對して巧に過渡の橋梁を架せり、之れを氏の宗教哲學と爲す、抑こヘーゲルに由れば信仰と知識は同一の内容を有するも唯その異なる所は形式の上において存するもの、然ればヘーゲルの説たる信仰

が寫象の形式の下に把挂するものを以て知識は之れを高めて以て概念の形式に由りて表彰し宗教が吾人の感情に由りてその信仰に到達せしむる所のものを以て哲學は吾人の理性に由りて之れを領得せしむ。然れば宗教と哲學は結局衝突撞着すべきものに非ずして融合一致すべきものなりと云ふにあり、ヘーゲルが寫象と概念、感情と理性の思想は一舉して直ちに信仰對知識の關係問題の上に横はれる一切の蟻根錯節を芟除し去り、寫象の形式てふ語は信仰知識の兩敵をして互に媾和し握手せしむるの魔力を逞うする咒文たるの觀あり、從ひて又ヘーゲルが信仰知識の調和説は多くの神學者輩をして其信仰の危期に際し、實際その心に安ずる所あらしめ、之に由りて基督教教會の信仰と學術的知識との間に媒介媾和の橋梁を架するに至りたるは疑ふ可らざるの事實なりとす、然れど若し人ありヘーゲルの所謂寫象の形式てふ語を解して古來民族の自然的想像が無意識的に産出し相承せし宗

教的意識なりと爲し、ストラツスが既に實際にそを試爲したるが如く、之れを呼ぶにミーツスなる語を以てせば果して如何、吾人は之れに由りて直に信仰其ものゝ上に危険の影響を來たさざるかを恐るゝものなり、そは姑く措き縱令ヘーゲルの説を以てするも彼の宗教なるものは知識上には其價值頗る減殺せらるゝを見ずんば非ず、何となれば若し彼の宗教なるものにして之を哲學に比して其表象せらるゝ形式や不適當に、其表象せらるゝ價值又鮮きものならんか、其宗教なるものは吾人の知識上より之れを云へば亦寸毫の價值なきものとなる可きを以てなり、蓋し内容と形式の兩者は到底しかく相分離すべきものに非ずして形式の醜は以て其内容の美を害すると鮮少ならざるが故に、ヘーゲルの信仰と知識の調和問題に關する解答は宗教に取りては頗る不適當のものと謂はざる可らず、是れヘーゲルの哲學々派中其内部に於て早く既に論難の呼聲囂々として起り來りたる所以にして、其左右

の而學派は各その見る所を異にし互に辯難攻撃を生じ來り遂にスト
ラウス自らも彼の知識と信仰の調和に關する解答の可能を遲疑しつ
ゝ、以て余の今茲に引抄せる氏が宗教哲學の兩者をして各自相離れて
各其分を守り、互に相侵害すると無く、靜平冷泊路傍の行人たらしめ以
て宗教家哲學者をして風馬牛の相及ばざるが如く、斯くして以て相互
に泰穩無事の生涯を送らしめんと、の斷案を下すに至らしめたるもの
とす。

七

シュライエルマッヘル氏の宗教と哲學の調和説

知識と信仰の調和に關する他の解答は有名なる神學者シュライエ
ルマッヘル氏に由りて提供せられたり、固より氏が此解答は全然其功
を奏したるものと云ふを得ざれども又頗る正常なるものありて存し、
氏は信仰と知識を截然相分別し以て其衝突を避けんと企圖せり、是れ
輒ち今を距ること百年以前即ち一七九九年に於て氏は有名なる氏の

「宗教講話」なる一書に於て其解答を試みたり、然り而て彼のスコラ哲學
たると新教正派たるを問はず、又彼の理性宗教たるとヘーゲル哲學
たるを論ぜず、彼等は等しく宗教や信仰や共に是れ吾人の思考と寫
象、知識と論證とに在りて存するを認容して立てるものなり、換言せ
ば彼等は皆宗教の智性的なる所以を承認せしものとす、然れば此に於
て生起し來る所の困難は、彼の互に獨立して相對峙せる宗教的知識と
科學的知識との兩者は、結局其一が他に隸屬し屈從するに至らざるも
のなるか、將た又彼等は結極互に融和す可きものなるかとの問題、是れ
なり、然れど彼の信仰と知識の兩者中その一が他に永く隸屬屈從する
を欲せざるや固より其所にして、信仰知識の不調和衝突は眞個に早晚
當に生じ來らざる可らざる必然的結果なりとす、而も人生の和合一致
を欲するの論理的自然の傾向は、斯かる衝突撞着を忍ばんと欲するも
到底得可からざる所のものなり、此秋に當り彼のシュライエルマッヘ

ル氏は信仰知識の衝突撞着を避けんが爲めに主張して曰く、抑々宗教なるものは其神髓本質に於ては決して知識思考の對象に非ずして感情の對象なりと、其意蓋し宗教は畢竟知識の波浪に由りて振撼簸搖せらる可きものに非ず、哲學は感情の事項を上下軒輊するの權能を有せず、從ひて知識を以て信仰を是非す可からず、信仰を以て知識を付度す可からず、此兩者は本來全く相異なる性質のものにして畢竟互に其領土畛域を異にせるものなれば、此兩者間には何等の衝突撞着をも醸出し得可きものに非ずと言ふに在り、則ちシュライエルマッヘル氏は宗教を以て絶對的憑依の感情にありて存すと説けり、既に宗教にして吾人の智性とは全然異なる絶對的憑依の感情に在りて存すとせば、何が故に智者も愚者も賢者も不肖者も等しく同一様なる宗教的信念に到達し得べからざるかと云ふに、此兩者は元そが有せる宗教的信仰を着色する所の事情を殊にせるが故に、智者と愚者賢者と不肖者の信仰は

互に相徑庭異同し各異なる形相を表出し來ると雖、此兩者が等しく是れ宗教的なり敬虔的信念たるの點に於ては則ち同一なりと謂ふに歸着す。

八

シュライエルマッヘル氏の信仰知識調和論の難點

然れどシュライエルマッヘルの惟へりしが如く、知識と信仰の調和は是の如く簡單にして能く容易に成遂し得可き業にあらず、何となれば彼の且つ感じ且つ考ふる所のものは即ち是れ畢竟同一人間に屬し、同一の人間にして全時にこの二作用を該ね具ふるものなればなり、是れ蓋しヘーゲルが嘗て冷評し去りたるが如く、吾人人類は其左右の袖裏に個々別々に知識と感情を藏くし持ち、各その必要なるに應じて或は感情を或は知識をと、知識感情の兩者中其一を一つ々々隨意に撮出擷抽し來りてそを使用するを得る様構造せられたる便利なる器具に非ざればなり、吾人は吾人精神の心理學的研究の結果眞に吾人精神の

本眞の根本的作用は寫象に非ずして感情にありて存するとを了知證信すると同時に、吾人は又感情が他の精神作用と極めて密接なる關係あるとの深さを認容し、感情は之を鏝鏘淘冶して一定の形式を得しむる時は必然的に思想と寫象とに變形改造し得可きとを領得すべきなり、是れ彼のロマンチック學派の碩學ノグリスが其哲學思辨の深邃なる、氏は思考を以て單に感情の活動なきものと傲し、之れを死せる感情と稱せし所以なりとす、故に一種特別なる感情たる宗教的直覺則ちシユライエールマッヘルの所謂宇宙の直觀や絶對的憑依の感情は又各自互に吾人の思考上に影響し、知識と感情は互に相犬牙交錯し、感情は遂に寫象と思考に轉遷移了するものとす、斯く思考と感情は極めて至緊至密近接不離の關係を有するものなりと雖も吾人は復自ら思考に二様の種類あるとを知らざる可らず、則ち科學の如き比較的感情の束縛羈絆を離れたる思考と、彼の美術宗教の如き主として感情の規定指導

の下に立てる所の思考と是れなり、是れ科學にありては抽象的思想や概念や理法を以て其對象と爲し、美術及び宗教にありては其の對象や之れを吾人の直覺上具體的記號的比喻的表出に訴へざる可らざる所以なりとす。

九

信仰知識の調和は如何に成果す可き乎

宗教に在りては思考は其第二位を占め、感情は第一位に在りて存するが故に、宗教的判斷は吾人心情の需要に應じ感情に由りて規定指導せらるゝ情的判斷ならざる可らず、此故に又近世の神學者はこの情的判斷をもちて價值判斷と稱す、此に於て宗教的信仰が由りて、以て千鈞の重きを爲せる至要なる問題は、主として吾人の感情に基ける宗教的直覺比喻的記號的に由りて表出せられたる對象は果して眞に實在せるものなる乎如何、その所謂情的判斷たる價值判斷は果して存在判斷なる乎との問題は是れなり、信仰は勿論此の問題に回答して曰く、然りそ

は單に價值判斷たるに止まらずして、その判斷は又現實性を有す、換言せば存在判斷なりと、然れどこの信仰の肯定せし命題は果して正確妥當なる乎如何、換言せばそれは實際に眞實なる乎、此問題や眞個に是れ古今哲學の自ら其論證の責を負ふ所のもの、然れど哲學は果して能く之れが解答を與ふるとを得可き乎、加之縱令彼の哲學なるものは能く其解答を與へ得可しとするも、斯くするときは哲學は宗教の冠位にあり、信仰の眞偽正邪を識別判定する主權は一切之れを擧げて哲學の掌中に一任し去りたるものに非ざる乎、果して然らば是れ豈に宗教其ものゝ爲めに不面目たらざる無き乎、這種の問題は又實に陸續相踵ぎて蜂起し來るを見る、此問題や彼哲學が認識論として一部其解答の任に當る可き所のもの、而も此難問を執へ來りて、自から之れを解釋し能く快刀一閃亂麻を斷つゝの概あるものは、則ち信仰の宗教哲學的考察なりとす、斯る考察の下にのみ初めて吾人の信仰は能く幾多の蟬根錯節を交

除し去りて向上一條の活路を彼岸に認め得可きなり、果して然らば此向上一條の活路とは何ぞ、曰くそれ信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據モトとするものなり、(舊伯來書第十一章第一節)との教義是れなり、信仰の對象は不可見的にして、知る可からず、證すべからざるものなり、カントの銳眼疾く既に此點を觀破し、信仰の對象はその本性上實に當さに然からざる可らざる所以を斷言せり、故にカントは彼の理性宗教が認めて以て自家の根本義と爲せる三大思想たる神の存在や意志の自由や靈魂の不滅の如きは到底之を現實界に於て獲得把持し得可らざる所以を道破し、這般問題に關する證明の如きも、それは單に吾人の理性的論斷にのみ由るが故に、到底矛盾無く一點の批難をも加ふべからざる完全無缺の證明たる能はざる所以を辯明せり、然れど吾人は哲學がそれを證明する能はざればとて、直に信仰の教ふる所を以て全然虛妄なりと斷じ、其價值判斷は何等の存在判斷たる能はざるものなりとは、